
破綻者の転生（仮）

ユースティリア・ツァラトゥストラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

破綻者の転生（仮）

【Nコード】

N4286V

【作者名】

ユースティリア・ツアラトウストラ

【あらすじ】

異常、とりあえず異常な男、ナガト長戸 アキラ亮は世界から排除された。
スムーズに抵抗することもなく、御門 千早として生まれ変わると同時に異常を封印した彼は転生後、様々なことに巻き込まれ結局はどうなるのだろうか？

ブログ（前書き）

駄文です。納得いかない内容が許せない方、設定がぬるいのが許せない方はバク転からロンドアートに繋げてから竜巻旋風脚の途中でバクボタンで戻ってください。

ブローグ

俺は今屋上にいる。

屋上といったら皆は何を最初に想像するだろう。

昼寝が気持ちいい場所？

仲良しと一緒に昼食を取れる憩いの場？

仲間と面白半分に夢を語った想い出の場？

卒業の日に告白をした、あるいは受けた微笑ましい場？

それとも男同士拳でわかり合った熱血な場？

いいや違う。

少なくとも俺にとっての『屋上』は、世の中のすべてから逃避する場だ。

昔からよく、夜に屋上へ出では星月を見て気を紛らわしたものだ。

そつえばこのセリフを聞いたことがあるか？

うる覚えだが

「人生はいつだってこんなはずじゃなかったことばかりだ！」

だったはずだ。そうリリカルなKYの名台詞だな。

しかしこのセリフは、

俺×現実×名台詞」「現実はいつだって平凡でつまらないことばかりだ」になる。

語呂が悪い？全然関係がない？知るか、俺の勝手だ。

ならばこれはどうだ？

「我々の生は苦しみと退屈以外のものからは成り立っていない」

アルトウール・ショーペンハウワーの言葉だ。

現実は嫌いだ。そして非現実に惹かれていくのは当たり前だ。

実際にも俺はありとあらゆる奇妙なことを行っている。

真面目に悪魔召喚を執行して、召喚プログラムも組んで、天使も呼びだそうとして。

魔道書と呼ばれる原典をなんとか探し出し、読み漁ってみたり。

俗に言う漫画修行と言われる、人間には不可能なレベルの修行をやたらめったら自分に課してみた。

そんなことをしていたら、ついたあだ名が『厨二病の鏡』。

普通の人よりも頭がいいのも、身体能力が高いのも理解している。

それだけ渴望し、それだけ苦悩し、これだけ得たのだから。

ありとあらゆる武術だって死に物狂いでいくつも習得した。

今だって、屋上にいる俺の姿はそのまま伸ばした黒い長髪、普通の顔に視線だけで殺せそうな黒目。

紅いロングコート、黒革のボディーマー、紅いジーンズに膝にはプロテクター、漆黒のブーツである。

服にはすべて防刃防弾繊維を組み込んでおり、コートの内側には古今東西の暗器の数々、ブーツの先端と踵には金属板。腰には日本刀『だんかいはいど壇壊廃土』

服も刀も自作。

異常。

一言でいうならその表現が一番しっくりくるだろう。

しかし彼にしてみれば『通常』なのだ。

もう分るだろう。いや解るざるをえないのだ。

彼の周囲の人達もしだいに嫌々ながら理解させられていったに違いない。

家族などは特に気のどくだろう。

彼は勤勉家で、努力家で、実力者で、孤独で、オタクで、人格破綻者。

そして隠れて傭兵紛いのことをしに海外に行く。

長戸^{ながと} 亮^{あきと}はそういうモノだった。

「……」

いつものように手すりに寄りかかり、星を見上げると憎らしいけど嫌いにならない月とそんなに数は多くないが結局は無数と表現する星。

ふと、星の位置が気になって見つめてみる。自分の星の近くにいつもは違う位置にあるはずの星があったからだ。

あれはなんだったか、暇つぶしに彼は考えてみる。ついでに大体の座標で計算もしてみる。

ここでこれに気を掛けなければ、また何か違ったかもしれない。

「あ、思い出した……」

それと同時にドンと後ろから衝撃が来て身体が宙に放りだされる。

そこにはそこには両手をつきだしたままニタリと嗤う母親。

あの顔はそうだ傭兵で稼いだ金を狙っていたな。

馬鹿め、俺が死んだら自動的にある場所へ送られることになっていくというのに。

お前に入る金はビター文ないというのに。

だが彼はそれを一瞥しただけで思い出した星を見続けていた。

「そう、あれは…^{アナレタ}殺人星」

占星術の本に書いてあった、主に他殺などの予兆に現れる星だった。

（あれって当たるもんなんだな）

そのまま彼は40mの高さから落下、頭から着地し即死した。

プロローグ2

しばらくして俺は目覚めた。

目覚めたというのは語弊があるかもしれないが、感覚的にはそうとしか言いようがなかった。

「しかも目覚めも最高と来たもんだ」

俺は身体のはねで起き上がり、手を上で組んで身体を反らした。

骨が音を立てて鳴り、息を思いつきり吸い込むと、とても美味かった。

それもそのはずだ、周りを見てみるとここはどうやら森の中らしいのだから。

「は？森？」

うん。待てよ？A目が覚めた。昨日の最後は胸糞悪い夢。

Bベット以外で寝ている訳がない。森でいい朝を迎える？

A「B「夢じゃない実は死んでいる（服装は持ち物はすべて昨日？のまま）」

追加事項：記憶の混濁はなし。

…異常だな。

そして目の前にどうぞ取って下さいと言わんばかりの黒と銀の自動拳銃2丁…。

手に取ってみるとそれは俺にとってある意味なじみの深い2丁だった。

「サムライエッジと…ソードカトラス??」

ベレッタM92FS『サムライエッジ』（ノーマルタイプ）とベレッタM92Fカスタム『ソードカトラススペシャル』。

ベレッタ以外なんの関連性があるのだろうか。

何にも知らない人が見れば正義の銃と悪の銃などとふざけた事をいうかもしれないが。

「実包^{たま}入りだし」

ソードカトラスのスライドを後ろに引くとガチャ、と音がしたので薬室を覗いてみると装填されたりしき9mmパラベラム弾が鈍い真鍮の色に光を反射していた。

よくみるとなるほど、傍らには1箱の弾薬とそれぞれ二つずつの弾込め済みの弾倉。

「ますます異常だ」

これは何かが起きる予感がぶんぶん匂ってきた。

そしてこれを置いた奴、絶対変。何故一々これをセレクトした？

まあとりあえず何か起こるのはわかった。
動く前に準備をしておかなくては。

とりあえずコートを脱ぐ。襟に血が付いていたのは…見なかったことにしたい。

中にしまっているのを片っ端から確認することにする。

ナイフ付きのツール、ランチャー・ナイフ、ミニチュアランボー？、
タシロ（アイヌの大型万能ナイフ、小型はマキリという）
古式鉄扇、棒手裏剣複数、ワイヤー、投げナイフ複数、バタフライ
ナイフ、ブルームーン・ファイター（手作りお気に入りの鍛造ナイフ、メテオライトが使われていて青く光る刃渡り25cm）…多いな。

「あ、これ」

ポケットに入っていたのは武装神姫、こひるの素体フィギュアだった。

なぜか「なんとなく雅^{みやび}」などといって気に入って以来綺麗にしてあったものだ。

…あれ？これもなんかおかしい。

あげてみれば、造りがこんなに細かったか？や、髪パーツが艶やかでサラサラになっていたりなど。

「そして何より…柔らかくて温かい」

まずポケットから出すのにつかんだ感触がふにっとしてた、確かめるように頬をつついてみると同じようにふにふに…。

「んん…。あ、おはようございます旦那様」

そんなことをしてたら眼を覚ました。ついでに目の前に浮いた。

「……ますますもってあり得ないほど異常だ」

とりあえず、コートにナイフなどをしまい、弾倉も突っ込んで着た。

銃は両方の腰に乱暴にねじ込んだ。

プロローグ3

とりあえず現実を見ようと歩き始めた。

手を壇壊廃土にかけ、いつでも抜けるように。

こひるは俺の横を顔の位置で飛びながら長筒『葛桜』を二つとも構えている。

なんでも、レーザーが撃てるらしい。

というかさっきまで素体だったのに目を離れたすきに完全武装状態になっていた。

「あれ？さっきまで武装してなかったよな？」

「あ、驚かせてしまいましたか。私の武装は普段、虚数空間に収納することが可能らしいのです」

などと云われた。虚数空間とか、らしいです。とか突っ込みたいけどやめておこう。

「もちろん旦那様の荷物も収納可能です」

「ああ、ありがとう…」

しばらく歩いたが何も起こらない。少し腹が減ったと思っているとこひるが「あ、お弁当ならありますよ。そろそろ時間ですしお昼に

しましょう」「とのこと。

…いつ用意したよ、とかいいかげんつつこんでもいいだろうか？

用意してくれたのは小型の重箱が二段。一段は炊き込みご飯でもう一段には伊達巻きに、大学イモ、唐揚げなどのおかずだ。

さらには魔法瓶を手に抱え、温かい緑茶をコップに淹れてくれた。普通に力は強いようだ。

「い、いただきます」

「どうぞ召し上がれ、旦那さま」

…少し新婚ってこんな感じか？と思ってしまった俺は悪くないだろう。

というより手作りの食事と云うのはひどく久しぶりじゃないだろうか？

「…ごちそうさまでした」

「お粗末さまでした」

というか使っている箸と箸置、よく見るとこひるの武装だった。…さすが箸型MMS。使われることに何らかの意義を感じているらしいのでまあいいか。

しかし食後に武装の首拔楊枝 未開紅を持って口内を掃除しようとするのはさすがにやめてもらった。

食事をしているうちにやはり急な変化に緊張していたであろう身体はいくらか慣れたようだ。

「落ち着きました？」

「ああ、おかげさまでね」

どうやらこひるにも気づかれるほど自分はガチガチだったらしい。

「それでは落ち着いたところで、少し説明をさせていただきますね」

神姫説明中…。

「と、云う訳なんです」

「…」

なんでもこひるには大事にしていた過程で付藻神の様なものが宿っていたらしく、それを起こしたのはこの世界の管理神だと名乗る男らしい。

その後身体ごと俺たちは今いる森…冥界らしい所に下ろされてこう伝えるように云われたそうだ。

俺の体には進化細胞ラーニングがなぜかあるらしく、元々はもつと早くに修正力に殺される予定だったのが、その才能と努力で生き残ってしまっ

た。

何度か傭兵時代に桁外れの強さを持った奴がいたような気もするが、それも修正力だったらしい。殺したけど。

次こそは次こそはと、どんどん殺され、最後に残った手段が神の力の直接介入、俺の力を殺^{アナレタ}人星の支配下に置きさらには無抵抗にしていってやっとならしたのか。

そして、俺にはここから脱出するという試練が与えられ、試練を成し遂げた暁には、俺を許容できる世界に転生と云う形で褒美をくれるらしい。

こひるも、俺と一緒に試練を受けることを頼みこみ、同じ世界に連れて行ってくれる約束をしたという。

「よいいこう、こひる。絶対に別の世界にいつてやる。ここで終わってたまるか」

「旦那さま…はい！お供します！」

つまらなかった人生が終わってから楽しくなってきたというのはなんとという皮肉だろうか。

だが乗ってやつてもいいだろう。別の世界、大いに結構！

俺は歯をむき出しにしてまるでブラクラのレヴィのように笑いながら2丁拳銃を構え、こひるは顔を引き締めながら長筒 葛桜を同じく2丁構えた。

「ミッションスタートだ！」

俺たちはこひるが示したゴールの方向、黄泉平坂目指して走り出した。

プロローグ 4

「！熱源反応3、来ました。アンデットです！」

「ダー（了解）！」

スチャ…ダンダンダン…！

すかさず現われたゾンビの様な奴にカトラスの鉛玉を頭に3発ぶち込んだ。

全弾命中。傭兵をやっていた身として、これくらいは余裕だ。

「それにしてもやる気入れた途端にこれとは…随分と見かけによらず行儀がいいじゃないか！どっかで神がみてたんじゃないのか？」

チャ…ダンダンダン…！

さらに逆方向に現れたアンデットにサムライエッジの鉛玉を同じく3発御馳走した。

「流石です！旦那さま！」

ピュピュピュン…！！

最後の一体はこひるのレーザーが風穴を開けていった。同じく頭…だ。

「おいおい…なんて物騒なんだよ、そんな綺麗に風通し良くなって…
どうやら小さいからといって関係なくおおきな戦力らしく、心強い。」

ちなみに今は常時「禁じ手 探り箸」というスキルでサーチをしているらしい。

「そう言わないでください。実弾兵器は未開紅と若鮎ナイツ（剣）くらいしかないんですから」

そう言っただけで苦笑しながらも、次々と現れるアンデットを報告しながら殲滅、前進していく。

「というかいまさらだがあいつらなんだ？」

「はい！あれはですね、冥界に落ちた人間が輪廻転生の際に落としていった罪や穢れなどが意思を持った物です！」

「なんだ、ただの産業廃棄物か」

「というか本当にバイオハザードですよ。あ、あれに噛みつかれると傷口からその穢れが身体に入り込んで害を及ぼすので気をつけて」

「感染するのかよ…マジでバイオだな」

「あとたびたび入り込んで捕食される人がいて…捕食したアンデットは怪人化…つまり進化するのでいる可能性が高いかと」

「…は！上等！」

それから何か来るたびにこひるが報告してくれているのだが、怪人化した奴がまた…なんというか。

「怪人化来ました！幽鬼 ガキ！妖鬼 シキガミです！」

「さらに来ました！外道 スライム！外道 モウリヨウです！」

「なんだよ！！女神転生かよ！馬鹿にしてんのかあいつゴラァ！！」

「あ、あははは…なんででしょうね…」

拳銃の弾倉も切れて再装填に時間がかかるのを見て壇壊廃土で斬りつけていく。

こひるも比較的サイズが小さいのやアンデットに向かって両手に構えた若鮎で潜りこむかのようにどんどん斬りつけていた。

「ギャー!!」「ガアツ!!」「コイツ!ツヨイ!!」

「クソウ!!『ジオ』!」

「てめ!ますますふざけんなあ!!しかも当たるか!んなもん!」

「グアアアア!!リフジンダア!!」

はいメガテンだよ完璧に!色んな意味で眼が点だよこの野郎が!!

とりあえずあらかた近くにいる奴が掃けたので俺達は弾倉に弾を込めながら休憩することにした。

「っていうかさつきからあまり疲れないんだが…」

「え?うゝん、そうですね…多分ですが世界というリミッターが外れて凄い勢いでラーニングで強くなっているからじゃないでしょうか」

ちなみに私は所有者のエネルギーで生きているようなものなので、同じくらいのスピードで強くなるのですが、とも言った。

うん、ラーニングスゲエ。あとエネルギー何たらとか初耳なんだけど。

そつえばさつきから普通に妖魔コッパテングとか夜魔フォーモリ

アとか妖鬼モムノフとか倒してた気がする。

あいつら確かレベル20近いし、確か何かでレベル20は人間では最強とか聞いた気がする。

「え？何？俺人間超えてる？」

「それ今更ですか…」

因みにしばらくしたらマハラギとか使えたからもう何も言えねえ…。

その後も敵はどんどん強くなっていき、それにつられるように俺たちも強くなっていくという。強さのインフレが起こり始めた。

今なんかもう堕天使デカラビアの群れから来る無数のメギドを避けつつ、9mm弾を撃ちこんでいる。

普通の弾丸ならもうこのレベルには効かないのだが、なぜか戦う過程で銃弾に魔力を込めた『至高の魔弾』をガンガン撃てるようになっていた。

勿論こひるも『至高の魔砲』なんてものを葛桜で撃ちまくっている訳だが。

実はこひるは必要ないのだが「え？ノリです」だそうだ。余裕そうだな。まあそのサイズだと殆ど被弾しないから楽そうだけど。

「おかえし！メギド！」

「ガアアアア！！」

ほらもう覚えちゃったし、マジラーニングスゲエ。

あともう少しで黄泉平坂というところでまた弾倉が切れたので休憩を兼ねて弾倉への再装填を行う。
たびたび拾う弾薬のおかげで助かった。

「さすがに疲れてきた」

「そう…ですね」

「というかこれ、まともな奴が来てクリアできるのか？させるつもりないだろう」

「ないんじゃないでしょうか？なにやら最後に巨大な反応もありますし」

黄泉平坂の前に行くといきなり目の前に巨大なものが落ちてきた。

「ほっほっほっほ」

頭の長い爺だった。

誰これ？とこひるに聞くと「ここに連れてきた張本人です」と言われた。

なるほど、想像通りの頭してんだな。

「それはそうじゃ、お主の想像から形作っておるのじゃからのう」
やはり心程度読めるのか。

「それぐらい出来ねば、祈りなど聞けるものか…そして、よくここまでたどり着いたの」

「当然だ。こひるもいてくれたからな」

「それで、ここは通してくれるんですね」

そうこひるが尋ねると神は大きくうなずき坂を指さした。

「さあ坂を登れ、登りきった先に来世が待っておる…勿論こひる君も持ち主と一緒にや
ただし少年よ。ここを登りきった時、君に何かしらの変化があるかもしれない」

「…どういうことだ」

「人間にはなにかしら汚いところがある、登っている時にそれを穢れとして落としてしまうからじゃ」

「…なんだ、いいことじゃん…わかった。有難う」

そうして俺たちは坂を登って行った。

「（ボソツ）たとえばその性格とか…性質や起源までは変えられんがのう」

登る、登る。

ひたすら登る。

そのたびに俺の体から黒い霧の様なものがどんどん出ていき、坂から転がって行った。

「あら、ボディの汚れが取れていきますよ」

同じく登っているこひるはなんと年月の積もった落ちない汚れがどんどん黒い霧となって落ちていた。

そのたびに、まるで新品のようになっていくところか完全に『おもちゃ』のボディから『生きた兵器』へと生まれ変わろうとしていた。

私の身体からもさつきまでの闘いの傷や汚れ、それどころかしみやニキビまで落ちていった。

世の中の女性が知ったら自殺者が増えそうに困りますね…。

ん……………？

いつから私の一人称は『私』になったんでしょう。なんだか言葉遣いも少し優しくなったような気が…。

「なんだか荒んだ心がいやされますね…」

「！？旦那さま！？どうしたんですか！！」

「いや、なんかね…汚い心まで落ちたような気分ですよ、こひる」

さあそろそろ光が強くなってきましたね。なんだか身体が軽くなってきました。

「さて、ではこひる、これからよろしくお願いしますね」

「は、はい旦那さま…って髪と瞳の色まで落ちて、銀髪碧眼になつてますう！？！？」

あら、どれだけ汚かったんでしょうか私。

啞然としているこひるの頭を撫でてみると、急に真っ赤になって慌てている。

とても可愛いと思う。

そして私たちは転生の光に吞まれたのでした。

第01話

新しく生を受けるまでの少しの時間、私は空間に漂いながら考えたことがある。

取り合えず、今までの名前は捨てよう。

なぜなら新しい母親もまた、お腹を痛めて産んでくれるのだから…と。

それにやはり以前の母は嫌いである。

「それでは私には先に行って待っています。旦那さま」

「うん、そっちで待っててね。こひる」

そういつてこひるが先に光となって消えていった。

「どうじゃ？気分は」

そうしてまた考え事に没頭しようかと思った時、坂の下であった神様の声がした。

「あ、はい。おかげさまで色々とすつきりすることが出来ました」

「うむうむ、結構結構！…所で少し話しておくことがある」

そういつて神様はこれからの事での注意事項を話し始めた。

「まず君のラーニングは坂を上がるまでの成長で今は止まっている。じゃが、転生して5歳の誕生日とともに君の記憶と同時にまた動き始めるじゃろう。」

そして君は18歳以降その影響でまったく年を取らなくなってしまった。まあ限定的な不老不死じゃな。

さらに、君の闇はやはり落としきることが出来なかったようじゃが…制御は出来るようになっていくはずじゃ、いざとなった時に切り替えれば戦闘能力の上昇を図れるはずじゃ、

これを『キリングモード』という。最後にこひる君が君の傍に堂々と居られるように『機械関係全般の知識』を授ける。こひる君が来たら、自分が作ったと言えいいようにじゃ。

ちなみに君の荷物はすべてこひる君に預けておるからな…以上じゃ」

「あ、はい…有難うございました」

一気に言われたがなんとか咀嚼し、礼を述べる。

しかしどう考えても私にそれだけしてくれるメリットがあるのだろうか。

「まあ、そう考えるのは仕方ないかの。正直メリットは無い。だがわしが管理を怠ったせいで君に迷惑を掛けたのはこの通りじゃ。その責任を果たしただけじゃ…ほれ迎えが来たぞ」

「…はい！有難うございました」

そして私も光となって消えていった。

チュンチュン…チチチ…。

眼が覚めて昨日とは違うことに気がつく。

そしてそうだ、今日は僕の5歳の誕生日だったと思い出す。

段々とさらに記憶が戻ってくると同時にラーニングも再起動したのが身体のちよつとした疼きでわかった。

そして僕の新しい名前は『御門 千早』。

鏡を見ると生前の（しかし穢れとして色が落ちて銀髪碧眼）容姿をそのまま小さくしたような感じた。

勿論（泣）男の子…というより可憐な？少女にしか見えないが…。

家族構成は

父 みかど 御門 くにひで 邦秀

母 みかど 御門 たえこ 妙子

双子の姉 みかど 御門 ちとせ 千歳

の僕を入れて4人…いや、

「おはようこひる」

「！おはようございます！旦那さま！」

どこからともなく飛んできて僕の胸に飛び込んでくる。

僕の記憶が戻るまで隠れながら僕を見守ってくれていた神姫…こひるを入れて5人だ。

さあ、これから頑張っていきましょう。

それから5年…。こういうのなんて言うんだっけ？金的？いや違う、痛いそれ。キンクリ、そう！キングクリムゾン！

…言ってみただけだよ。

武装神姫を単体はやっぱり言いわけには厳しいと思ったので何体か作ってようやくこひるを紹介することが出来たのが2年前。

そのおりに姉さんにアーンヴァルを、渡會 史（侍女として家系で努めているという一つ年下の女の子）にフブキを上げた所とても喜ばれた。

その時史がちょっと複雑な顔をしていたが。

そしてこつそりとディアラハン使ったり、治療用ナノマシンを注入したりして不自然にならない程度に姉さんを治すことにも成功。

「ちーちゃん、ありがとうね」

…ばれていないはずだ。その都度時間を止めて治療をしたんだから。

それにしてもうちの家はとうやら昔からの金持ちだったらしく、習

いごとが沢山だった。

お花に茶道などの嗜み、ピアノやヴァイオリン等楽器の扱い、果ては生前もやったが武術まで。

……まあほとんどラーニングしてしまったが…お花…華道ばかりは感性なのでラーニング外なため、なかなか楽しいと感じた。

勿論隠れて銃、魔法の練習は怠っていない。

そんなことをやっていたら、「本家の瑞穂君より優秀だ」などと言われるようになっていたが…まず誰です？

まあ、そんな感じで面倒なことが一通り済んだので、僕はこひると何故かついてきた史と一緒に射撃をしに海外のフィールドへ出た。

一週間の予定だったが、何故か街中で死んだ人が動いて襲って来始めたので、史を庇いながらカトラスとサムライエッジで脱出を始めた。

その時にクレア・レッドフィールド、レオン・S・ケネディ、ジル・バレンタインの三人の警官と共同戦線を張って逃げた。

…そういえばその時『ラクーン市警』と言われて内心『あ、マジですか』と思ったのは無かったことにしたい。

ちなみにその時初めて街の名前を確認した。

史は最初のうちは吐いたり、泣きついてきたりして大変だったが、途中から僕達の動きを見て驚き、何とか後をついて来ていた。

僕とこひるは終始、史を守ることに全力だったのだが、途中から史

が赤い顔で僕をじつと見つめてきたので一時期感染したかと冷や汗をかいたりした。

そろそろ脱出できるという時だった。しつこく共同していた3人を追いかけてきた巨漢の追跡者が戦闘中、史に向かつてRPG-7をブツ放したのだ。僕はとっさに史の前に立ちふさがり、防御陣を展開しようとした。

そしてその時だった。僕には何か能力があったらしく目の前にすっぽり2人が入る程の銀の幕を展開、RPG-7の衝撃をあり得ないことにまともに耐えきったのだ。

その後の戦闘による検証の結果、ナイフにしたり、凶悪なナックルになったり、銃弾（火薬は魔力）に使えたりと多様性があったので僕はこれを「自由自在な銀を操る程度の能力」又の名を「シルバーブル（湧き出る白銀）」と名付けた。

…東方好きなんですもの、別名はなんとなく使い分ける必要があった時のためと思い付きです。

まあ、母さんと千歳さんには面倒だったので何事もなかったように帰った。

そしてそのままさらに7年、中学3年生の夏休みを利用してこひるだけ連れて海外の射撃場に久しぶりに行こうとしたんだ。

前はいきなり実戦になってしまったし、相手が相手だったから人間相手に通じるかわからないからだ。…と云うのは建前で、ただ単に射撃場の空気が好きだからだ。

家に作ろうかとも思ったけど、やっぱり日本の警察と銃刀法は締め付けが強すぎると思う。

今回はやんちゃしてみようと思って南の方へ行こうと思った。「自由自在な銀を操る程度の能力」も色々と広い所で検証したかった。

すると子会社からボルネオまで行く船が出ると聞いたので、ちょうどいいや乗っけてもらおう（ついでにそっちの方で面白い銃あったら手に入れよう）的な軽い感じで乗っけてもらった。

「ん、いい天気ね」

「はい、旦那さま！」

あれから武装神姫（非武装の売り出し名はサポートエンジェル）が個人用サポート端末として日本の一部で使われるようになってからこひるは大体僕の肩の上にいるのが定位置になっている。

まあ初めのうちは色モノだとか役に立つはずがないだとか頭の固いのが五月蠅かったがしばらくしたらすぐに黙った。

当たり前だ、彼女たちは感情プロトコルの制御できるAIと容量、処理速度を持った一種のミニ・コンピュータだ。個人のサポート程度出来て当然だ。

今では十数種類が発売されていて、容姿は勿論、性格は個体ごとに違う。まだ値段は高いが街でも一部の人の鞆や肩に乗っているのをたまに見る様にもなった。

まあ、武装が出来て一流の戦闘ができるのはこひるだけ、というのが作る気は無いが。

「あれ、なんで子供が？…あとサポートエンジェル？」

「あ、こんにちは」

「どうもお邪魔してます」

数日後、考え事していると、暑いのかシャツの袖を捲り上げネクタイを緩めた若い男が話しかけてきた。

「僕達、上に掛け合って、此処の一室を使わせてもらっているんです。丁度行き先が同じだったので」

「ああそうなんだ、よろしく。僕は岡島、岡島 緑郎。君は――」

ダンダンダン！！！！

その後あっという間に制圧された。だってこの船武器ないんですもの。

動けばよかったって？これは動かなければ何事もなく終わるパターンって分かったし、派手なことしたくないし。

「これは…海賊かな？こひる」

「えーと…そのようで」

「…」

「なんで出かけるところも厄介事に巻き込まれるのかな」

「さあ…サンタ・マリアがお茶目な悪戯でもしているのではないで

しょうか？」

「いやいや、笑えないし、っていうかこひるはさ、和風仕様じゃなかったわけ？」

そうやって解放されるまでほかの乗員と一か所に集まっていた。ちなみにさっきの男…岡島さんはなんか海賊の女にディスク取られて、大きい黒人のサングラス掛けたスキンヘッドに殴られてた。

…そろそろ解放するらしい。

あ、岡島さん人質に連れてかれるみたい。ご愁傷さま。

「おら！その喋っている女と…人形？いいやお前らもこっち来い！」

「え？」

「はい？」

あ、なんか僕達も人質追加っぽい。

っていうか突き付けている銃ってソードカトラスだよね？

「なんでバイオに続いてブラクラまで…この世界は一体何なの？」

「旦那さま！私が付いております！」

レヴィさんその人でした。

あ、ということは岡島 緑郎ってロックの事で、サングラスの黒人はダッチか。

あ、なんか合ってたっぽい。

でも黙って出てきちゃったからなあ……。いいやしばらく偽名使おう。

第02話（前書き）

どの程度のオリ千早を持っていこうか…悩みどころです。
2011.8.23 修正

第02話

「俺は…どうなってしまふのだろう」

「まあまあ…きつと大丈夫ですって」

「そうですね、気を強く持って」

ブラック・ラグーン号の船内の端でに体育座りをしている岡島を僕とこひるが何とか慰めようとするが効果は薄い。

「会社は俺の事を助けてくれるだろうか」

「え…つと…」

「なんとかありますよ…きつと」

あまりにも彼のテンションが低いので少し疲れてきた。

まあ彼が悪い訳じゃない。落ち込みようもわかる。

「レヴィお前な！こんなの攫ってきてどうすんだ！ええ？おい！！」

「わかってねエよダッチ、わかってねエ！！バラライカのアマな、

こっちの足元見てやがんだよ！！」

「レヴィが悪いね」メガネヤロ「だまれ四つ目！！」

岡島がぶつぶつと悪いループに入っただので彼らの様子を見ると…まあ原作通りだ。とてもうるさい、耳がキーンとする。

「ああそうかい！！わかったよこのタコ！！」

おっと、危ないです。

レヴィがダッチの方を向いたままこっちにカトラス向けました。

「こひる、鉄扇」

「はい、旦那さま」

バンバンバンバン！！！！

「ぶっ殺して海ん中叩きこみゃいいんだろ！！」

「！！！！うわあっやめろっ！！」

岡島の悲鳴をバツクに聞きながら、鉄扇で弾くことにしました。あ、なんか計器に当たった。

「ああ！計器が！！やめる馬鹿！船を壊すな！！」

「うるせえ！！あとてめガキ！何食わぬ顔で邪魔すんな！！」

「やめて止めてやめ！あれ？弾が来ないってやっぱ来たあ！！」

そしてしばらくしてダッチに羽交い絞めにされて止められたレヴィは奥で寝るといつて消えた。
ダッチさんと僕達はなんか泣きそうになってる岡島にしゃがんで声を掛けた。

「おい、日本人…駄目か？」

「岡島さん？もう大丈夫ですよ？怖かったですね」

「生きてる？なんでか知らんが俺、君のおかげで生きてる…」

なんかちよつと子犬チックで可愛かったと思ったのは内緒だ。

「…ダッチさんちよつと上で空気でも吸わせましょう」

「…オーライ。そうだな、ちょっと一服させよう。それより天使、エンジェルお前何気に凄いな」

「旦那さまが…天使…エンジェルいいこといいですね」

「そうだろ？神は信じねえがこの愛天使なら無条件降伏するぜ？」

「はははは…はあ」

こひる、そりやないよ。

そしてダッチさんもそんな風に思ってたなんて。

ていうかそんな性格だったっけ？

僕達は甲板に出て壁に寄りかかる、岡島はともかく僕達は不幸と思っていたけど結構面白くやっていけるような気がした。

「アメリカン・スピリットしかねえが我慢してくれ」

「…吸えるならなんでもいいよ」

…憂鬱げに煙草を曇らせる2人を見て久しぶり（前世振り？）に僕も吸いたくなった。

あ、確か荷物は全部こひるが持つてるって。

「こひる、ピースちょうだ「駄目ですよ旦那さま」えー…」

「天使これでもいいか」
エンジェル

「あ、駄目「ありがとうございますダッチさん」…はあ仕方ないですねえ」

ダッチさんいい人！僕はさっそく指先に火を灯して煙草をふかし始めた。

前世で、傭兵家業の途中で教わった（いくつかしか習得できなかった

たがトーチ）灯火の魔術。

ライターいらずで本当助かる。

「……オーライオーライ。さすが天使。エンジェル マジ天使」

僕に使わせようとしたライターを構えたままダッチさんは煙草を落
としそうになり慌てて取り繕った。

…そのネタ解ってて使ってますか？

「…いいんですか旦那さま？そんなもの目の前で使っちゃって」

こひるが少し咎めるような顔でジーと横から見つめてきた。
そんなことしても可愛いだけだから撫でる。

「大丈夫だよ。こういう所はね、細かい詮索はしないのが暗黙の了解なのだから」

「…それなら…まあいいですが」

それに上手くいけば僕達もラグーン商会でしばらく過ごせるし。

「…神様、ああ神様。助けてくれ…」

ずりずりずり〜。

あ、ダッチさんに現実突き付けられて岡島がタレた。

「…神様はこういうことはガン無視ですが…まあしばらくは僕達がいまですの」

「旦那さまに任せるとよいかと、岡島様」

なんか不憫だったのでとりあえず笑顔で頭を撫でておいた。

「…ああ本当に天使に見える、ありがとう」

ブルータス、お前もか。

パリイ！！ゴッ！！バキイ！！

「チハヤ・キサキノミヤに…ロクロウ・オカジマ？^{エンジェル}天使はともかくお前、変な名前だ」

「…気にしてるんだ。放つといてくれよ」

夜、僕達はあのイエロー・フラッグに呑みに来ていた。

ブラック・ラグリーン号を降りる少し前に僕はこひるに出してもらって前世の黒ずくめに着替えておいた。装備も万端だ。

なんたつてあのイエロー・フラッグだからね。

ダッチさんにいつ着替えたか聞かれたのでこひるに出してもらったという。

「…サポートエンジェルが凄いのか…いや^{エンジェル}天使が凄いのか」

と勝手に納得していた。さすがダッチさん適応が早いね。

なんか製作者つていうのもすでにばれているっぽいし、母方の姓を名乗った意味なかったかな？

「おつとすまねえ。口さがねえのが性分だな。というか天使^{エンジェル}日本人だったのか、てつきり北欧だと思っただぜ」

「まあ、隔世遺伝なので…クォーターなんです、これでも」

グシャア！！ドカツ！！てめ…ふざけんな！ガツシャーン！！

「…それにしてもこの酒場はひどい。地の果てだ」

「うまい喻えだ。ここは元々南ベトナムの敗残兵が始めた店だが…逃亡兵^{フッカー}なんぞを匿^{ジャネーシー}つたりしているうち、気が付きや悪の吹き溜まりだ。娼婦^{フッカー}ヤク中傭兵殺し屋（ジヨブキラー）。どうしようもねえ、無法者ばかりさ」

天使とは大違いだ、とダッチは言った。ごめん、後者2つは経験済みだよ…主に前世。

「嫌いかね、ヤハ？ロツク？」

「いや、僕はもつと酷いとこ知っていますし」

「居酒屋が一番いいや。大体俺、争いごとにはむいてないんだよ」

おゝ、僕、ヤハだって。メギドっぽくない？

「そういう顔だ…ヤハは意外だが…」

そういうとダッチ（敬称はいらないと言われた）はベニーに電話を入れてくると言って立ち上がった。

僕の頭を撫でてから。

「ミスタ・ダッチ！！さっき俺たちの事なんて呼んだ？」

ロックはそういつて電話機に歩いて行くダッチに声を掛けるとダッチは手を上げてこういつた。

「ロクロウだからロック。クールだろ？そしてチハヤだからヤハ、キュートだろ？」と。

「…ロックねえ」

「ねえこひる、ヤハって可愛いのか？」

「…ありだと思いますヤハ様」

早速ですか…。

2人で微妙な顔をしてお互いの顔を見た。

ちなみにこひるは僕の前にいつ用意したのかつまみと箸（武装）を置いてロックとの間の机にちょこんと座っていて、僕のラムが減るとささず注いでいる。

そして本人は日本酒をやっている。ここにあったのが驚きだ、バオさん（マスター）何気に自慢げだった。

「気にしなさんな。あだ名をつけるのが好きなんだよ」

そついつてロックの隣に座っていたベニーが話しかけてきた。

「変わってるんだよ、彼は。2年付き合ってたことは、タフで知的で変人だったことと…最近可愛い子に甘いつてことが解ったくらいだ」

理解しようとしたって無駄だね、と彼は言った。僕を見て…え、僕？

カラン…カラン…。

とりあえず杯が差し出されたので僕達はそれに軽く打ちつけた。

「どうも」

「よろしくお願いします」

「それよりもヤハ…でよかったかな？君、見た所サポートエンジェルに凄い精通していると見たんだが」

「まあ、この子は僕が作りましたし、内緒ですよ？…それより貴方も中々できるようですね」

「お？解るかいってそれ君が作ったのかい！？」

ベニーとしばらく盛り上がった。

どうやら彼は最初期からサポートエンジェルの有用性に注目していたらしく、彼の観点から、色々な感想や構想も聞くことが出来た。つい、こひるの特別製とスペックを語ってしまったのは後悔していない。

「バカルデイあるだけ持ってこい！！！」

なにかあったのかロックとレヴィがラムの飲み比べを始めた。

「…彼、争いごとは嫌いなんじゃない？」

「男には譲れないものがあつたんですよ…多分」

そしてそれは放っておいて、またベニーとの話に花を咲かす。

とりあえず後でどれかをお近づきの印として進呈するとう。それを話したらベニーが子供のように喜んでいた。両手を握られて感謝をされたがちょ…近い、近いよベニー。なんか後ろの2人と野次馬も盛り上がっているし。

バン！！

「イエア！楽しく飲んでるかクソ共？俺からの素敵なプレゼントだ」そしてそれは唐突に始まった。

キン…と抜けるような金属音に視線を向けると、それはこちらに投擲された――。

「ヤハ様！攻撃手榴弾です！」
コンカッショングレネード

「解ってる！銀よ――」

「うわあ！！なにこれ！？」「頭下げて！」「はいい！？」

防壁『劇場の銀幕』

僕はロツクをカウンターの下に引き倒し、半透明の銀幕を彼の前に展開した！

コンカッショングレネード
攻撃手榴弾

主に爆風などで狭い範囲の目標を殺傷するもの。

破片手榴弾などは防^{フリ}御^グ手榴^グ弾^レと呼^ネぶ^{ード}。

第02話（後書き）

たまに一般的によくわからない言葉などを最後に解説しますが・・・ググればわかります。それでもこれ違う、という人がいたら指摘してくださいとうれしいです。

第03話（前書き）

すいません間を広げすぎました。もっと早く投稿出来るようにがんばります。

第03話

「野郎共！パーティ・タイムだ！！」

そういつていきなり入ってきた軍服の集団は先ほどの贈り物に続いて鉛弾を無差別に店内に撒き散らし始める。

店内は混乱状態、急転直下のキルゾーンと化し、先ほどまで薬をやっていた男や客を探していた娼婦、飲んだくれなんかも関係なく撃ち殺されていく。

「わああっ！！何コレ！？そして何アレ！？もう嫌だ！たくさんだ！せつかく国立でいいとこ就職したのに！！コレじゃあんまりだ！！」

「はい。舌嚙むから口閉じて。カウンターの向こう側にいるレヴィと合流しましょうね」

「何でそんなに平気なんだよぉ！！たたた助けて！！！！」

そのままロツクの襟首をつかんでカウンターの端までいつて姿を隠す。銀幕も解除。

「こひる、いる？…ってなんで胸元に入っているの？」

「まあ…なんとなくですね」

「まあいいや、迎撃準備を」

「御意です」

僕は腰のホルダーからカトラスとサムライエッジを取り出してスライドを引き、一度弾倉を抜く…うん、腰の予備も合わせて計45発。弾は十分のようだ。

こひるは葛桜を組み上げる。

「クソッ。来るのが早え！レヴィ無事か！！」

「生きてるよー」

「ベニー！！」

「不思議と生きてる」

「ロック、ヤハ」迎撃準備は完了してます。ロックは横にいます」
「速いなおい」

そういえばベニーっては何気に僕の後ろで銀幕に隠れてやり過ごしてたんだよね…意外にやるなあ。

「レヴィ！聞いたな！二挺拳銃は伊達じゃねえってところ——見せてやれ！！」
「OH YEAH！！！」

その声と同時にレヴィが飛び出し、続くように僕とこひるもカウンターに飛び上がった。

「ぶっ殺せ！！」

といわれても弾見えるし二人とも。

こひるはまず当たらないし、フィールド張っているから無意味。

ガンガンガン！！

弾を見て避けつつヘッドショットを三人。

こひるも二人レーザーで貫いて絶命させた…店外の奴を壁越しに。

「よっ…お前らやるじゃねえか」

「出てけレヴィ迷惑だ！何回店がぶっ壊れたと思ってやがる！」

「んー三回目か？」

レヴィが戻ってきた。弾が尽きたようで新しい弾倉を入れている。
…あ、そうだ。

「レヴィ。コレ使ってみてくれる？威力の保障はするから」

「あ？…なんだこれ？銀の銃弾か？…冗談はよせよ」

「いや、下手な鉛弾より強力だよ？僕も使ってるし。それにレヴィ
だったら大丈夫ですよね？」

「…わあかったよ。ツチ変な奴」

そういつてレヴィは僕が渡した銀の弾倉を込めて、通常の弾倉を腰
にねじ込んだ。

ちなみにこの間僕たち二人はずっと弾よけしながら、迎撃中だ。
そのお陰かダッチも合流してきた。

「…いや天使ちゃんマジ天使」

「一言目がそれですかダッチ。とりあえずレヴィと僕、こひるで道
を開きますから、車へ急いでください。ロック！いつまで縮こまっ
ているんです！ちゃんとついていきなさい！」

「わかった！ベニー！裏から行つて車とつて来い！！」

「オーケーだ」

「レヴィ、いきますよ」

「何でお前が…まあいいや。」

「レヴィいまだ！」

「あいよ」

僕たち3人は端の出口に向かって走り出しつつ周りの掃除をする。ロックも何とかついていつているようだ。

そのまま、僕たちはラグーン号までたどり着き、外へ逃げた。

その途中レヴィに今度その弾売ってくれといわれ、元がそもそもアレなので10発2ドルで口径による増額なしで売ると約束するとなぜか気に入られた。

ベニーが興味津々だったけどダッチに止められていたが、そのとき理由が「だって天使だからマジで」だそうだ。

…なんかダッチの印象が変わり始めている僕がいる。そしてそれで納得するベニーもベニーだ。

「んーとこれくらいでいいかな？」

僕は甲板でレヴィに売る銀弾を造り出していた。

口径の約2倍の威力に火薬が魔力だから音も静かで煙も少ないという、理想の弾丸だ。

本当は瞬時に出せればいいのだが、まだ細かい物を造るのは集中しないと無理なので今こうしているわけだ。

特に弾丸などは精密なカラクリの部品に等しく、ミリ以下で同じく量産をしないといけないからなおさらだ。

シンプルなほど難しい。

まだ1発あたり10秒、しかも少し疲れるという状態だ。まあ先は長いし、これもいい具合に練習になると思ったからで。

その代わり瞬時にイメージするようなもの、たとえば先ほどの銀幕など、あまり細かく設定しなくてもいいものは殆ど一瞬とっていいほどに造り出せるが。

ん？箸？…造らないよ。以前造ったならこひるに存在意義がどうのこうのって泣かれたから。

「レヴィ。できたよ」

弾の出来ぐらいに満足した僕は、軽銀で造ったボックスに入れた銀弾を、中にいるレヴィに渡しに行く。

「おっ！サンキュ！…約束どおり50発だな、ホレ」

「…うん、ちょうど10ドルだね。またどうぞ」

おええええええ…。

なんてにこやかに話してたらロックがいきなり船内で吐いた。

「あッ吐きやがったコイツ！！」

「どうしました？船酔いですか？」

顔色が悪いのを見て僕は肩を貸す、そのままレヴィを見るとやれやれといった感じで反対の方を持つてくれた。

「ダッチ、ロックを風に当てさせます」

「…しょうがねえなあ、ヤハ、レヴィ、頼んだ」

「世話が焼けるぜ、ったくよ…」

「おえええええええ…」

そのまま船の手すりまで連れていくとまだ全部吐いていなかったのかロックは残りを吐き始めた。

「…全部吐いたほうがいいです、僕がついてますから」

そういつて落ち着くまで背中をさすってあげた。

落ち着いて、なにがあったのかを聞いてみると何でも会社の闇に知らない間に巻き込まれていたらしく、今回の件は無かったことにされたこと。

残りの社員のためだといわれて見捨てられたことなどを話してくれた。

「…あっさり見限られたなア。…ま、同情はするけどよ」

…今では主要なイベントを少ししか覚えていないけれど、あの子会社、そんなことしていたのか…帰ったら潰そう。

名目は僕が危険な目にあっただということ…まあ半分近く僕の滞在していたっていうのも入っているけど、母さんに怒られたくないからね。

まとめて泥かぶってもらおう。今決めた、そう決めた。

と、その前に見えてきた。

レヴィのマイクを半ば分捕るようにしてベニーに伝える。

「ベニー、ダッチ！ガンシップです！」

『は？なんだって』ダッチ！ヤハの言うことは本当だ！僕も今確認

それをみた1機めのパイロットが「誰だ！邪魔をするなあ！」といっていることから、第3勢力と判断した僕は即座にドラグノフを立ったまま構え、

ガウン！！

そして撃つ。

弾丸は勿論銀だがモノロー効果狙いの魔力をたっぷりと充填してある弾丸だ。

ミサイルの爆薬に着弾したそれは海上で派手に吹き飛んだ。

僕はそのままスコープの倍率を上げ、第2のへりを見つめた。

転生者 side

俺は神と名乗る奴から、ランダムに能力を与えられ、ここに送られた。

能力は飛行するものに限りの創造能力だ。ひとつまでしか維持はできないが、武装つきならその弾数は無限。

剣と魔法の世界じゃないが中々好き勝手できるいい力だ。そして俺イケメン。

この力を使って盗みから始まりなんだってやった。女だって好きなだけ、捕まえて無理やりなんてのも日常茶飯事だ。

そんな俺はこの世界にロアナプラがあることを知った。おもしれえ！ブラックラグーンの原作をめちゃくちやにしてやるぜ！！

原作と同じヘリ（ただし装甲は改造）でラグーン号を追う殺し屋の後ろにばれない様についていった。

どうせならはなっからミサイルぶちこんであっけなく終わらせるっていうのも面白い。どうせ殺し屋も後で片付ければいいんだ。そしてそのうちあの双子を捕まえてやる。

そおれ！発射だ！

…あれ？誤爆か？創造が甘かったか？それともレヴィが打ち落とせるほどの腕を持っていたのか？

…まあいい。この煙が晴れたらもう一発だ。あまりにも遠いからちよつとロツクオンがしにくいんだよ。

さあて、見えてきた…と思ったらヘリの前面のガラスにひびが入った。

まあ打ち抜けるわけでもなしと考えた瞬間そこから一瞬で爆風が機内を襲った。

なあにこれゝ。ぶべらっwww。

side out

「…ふう。って一息ついている暇はないな」

第2のヘリの機内がモンロー効果で悲惨になっているのを一瞥してすぐに僕はドラグノフをこひるにしまわせて障害物に身を隠した。どうやら商会の皆はミサイルにすら気づいていないようなのでまあいい、が今敵対しているE・Oだったっけ？のパイロットは操縦

ミスで勝手に落ちたと思っているらしい。

…名も知らぬ誰かさん、ご愁傷様。

その後理由はわからないがE・Oのパイロットはヘリの高度を上げて先に行ってしまった。

「…お二人さん？言い争いはそこまでにして置いてください。攻撃がやみましたよ？」

「…とりあえず中もどるぞ」

「はあ…、助かった…わけないよなあ」

三人で船内に戻ると、ベニーとダッチは海図を見つめてうなづいていた。

「ああ畜生^{デム}！わかったぞ！」

「…何がだ？」

ベニーが悔しそうな顔をして海図を指差す。

僕たちも一緒に覗き込んでみるとそこは水路。

「…水路、ですね。ということは」

「そう！水路だ！この一帯はバラワン入り口まで岩礁が続いているんだ」

「つまり逃げ場がない、と…なるほどな」

「僕たちは奴をまくつもりでいて逆に誘導され、罠に飛び込んだというのですか」

原作であればこの後ロックが案を出して認められるということがお

きる…時間がもつたない。こつちから話題を振ることにしよう。

「ちよつと待てよ「ロツク」！騒いでも何も変わりません。生き残りたければ頭を使つて考えてください」…すまない、わかつた」

僕はみんなの真ん中に立つ、話の主導権を握るためだ。予想通り皆の視線が僕に集まる。

「正直に言いましょう。僕達はここで負けても死にません」

「…天使のあの不可解な力のことか？」

「そのとおりですダツチ。しかし僕単体の力では死なないことは保障されますが勝てません」

「ああ？なんでだよ？」

「まだこの力を使いこなせていないからです。だから…多少なら無茶な賭けがノーリスクでできますよ？まあ、負けつていうのがつきますが…」

そう話すと場の空気がいつそう落ち着いて皆懸命に案を出そうとしていた。

その顔には負けるのは嫌だと出ていた。

「ガス切れ…いや弾切れの線は…ないな」

「腐つてもE・Oの兵隊だそんなへマはないだろうな」

…そろそろこの話題に触れてもいい頃合だろう。

「船の損傷は…見たところたいしたことはないようですが…積んだままの魚雷がネツクですね。」

ロツクがなにかを思いついたようにハッとこちらを見る。

僕もロツクを見てウインク、言葉を続ける。

「なまじ威力があるせいで被弾でもしたらラグーン号がアポロになつてしまいますねえ」

「積みっぱなしにしとくからだよ、このボケナス！ださいアポロになんぞに乗りたかねえぞ！」

「…おつかねえな、おい。俺はアームストロングにでもなれってか？」

「ダッチ？岩礁出口に何かがあるか。あんたわかるか？」

ロツクの案が出始めた。いくつかの質問をした後にロツクは僕を見る。

その顔はいたずらを思いついた子供のような笑顔だった。さっきのこと信じてるからな、とでも言いたいらしい。僕もにこつと笑ってうなづく。

「魚雷だよ。奴をアポロにできるぜ…皆聞いてくれ」

…ロツクなんでこっち見て顔を赤くするの？

「……………無茶だ。無茶だが…ヤハのお陰で保険があるから大丈夫そうだな。それでもできそうにないが」

「いいや。できるさ。アンカーで制動さえ掛ければ後はタイミングの問題だけだ！」

「ダツチ。どの道手はねえんだ。案があるだけましだろ…負けんのは癪だしよ。あたしはのつた。」

「…この程度なら僕の保険も十分効きますね。ロック、勝算はあるのですか」

僕の質問にロックは頷いた。

「見てて気づいた。あいつらは…追い掛け回して楽しんだ。圧倒的に有利なのことも奴らは知ってる——なのに、わざわざ仕切りなおす理由はなんだ？」

ロックがこちらを見てくる。

「…罠にはまって取り乱しているであろう私達を眺めるための特等席を用意しているからですね」

「そうだ、だから俺達がチキンレースを仕掛ければ必ず乗ってくる…あっちから見れば負ける理由がないのだから。」

確信とはいえない、ここから先は船長であるあんたが判断してくれ。

「

のるか、そるかだ。

そついうとロックは言うことは全部言ったかのようにダツチを見たまま黙り込んだ。

「…まったく、とんでもねえ野郎を拾ったなア。イカれてる

としか思えねえぜ。
だが面白い。面白ってのは大事なことで、ロック。
やったろっじゃねえか」

チキンレースのスタート地点。作戦は始まった。
逆からは遠くで浮遊していたガンシップが降下して向かってきている。

「ダッチ！相手は作戦通りに向かってきています！始めてください！僕はカバーに回ります！」

「聞いたなロック！！やるこたアわかってるな？」

「ロケットが飛んできたらあさっての方向に向けて撃つ！」

信号弾を持ったロックが前方をにらむ。

「レヴィ！チキンレースにさらに乗せてやれ」
「任せな！」

レヴィもゲパードをひたすらに撃つ。効きはしないが相手を焚きつけるには十分だ。

そしてステップ2！ついにガンシップのミサイルが発射された！

「ロック！信号弾を！」
「くっ！」

ロツクの放った熱源によりミサイルがそれて爆発する。

『アルペンコースに入ったぞ！残り150フィート！3人ともキャビンに戻れ！』

その言葉とともに距離のカウントダウンが始まる。最後に僕が戻ろうとしたときに重い射撃音が聞こえた。

「！？機銃！？」

「ヤハ様！？」

魚雷にあたるとマズイ。予想外だ！腰から壇壊廃土を抜いて銀でコーティング。魚雷に当たらないように機銃を弾いていく！！

ガンガン！ギャリイ！！チュンチュイン！！

横では僕に捕まりながらも葛桜で同じようにしてくれていた。

『ヤハ！？早く戻れ！』

「僕は大丈夫ですベニー！ダッチ！魚雷を！！」

『無事でいろよ！？体を固定しろ！！アンカーを撃て！！…魚雷固定解除！！！！』

「銀よ！」

ドグアシャ！！

魚雷の固定が外れガンシップの操縦席に刺さる。

爆発する直前僕とロツクは中指を立てて突き出しこいつた。

「「してやったぜ」」

ドガアアアアン！！！！！！

「これは…銀粘土？」

ダッチはガラスを突き破ったはずの頭にくっついていて、塊を手で取ってそう呟いた。

「おかげで頭は切んなかったが…成功するとは信じられねえ。サングラスも…粘土まみれだが無事だ。

アーメン・ハレルヤ・ピーナツバターだ」

「…ファッキンクライスト様々だがもう二度とやらねえぞ…とここでこの銀粘土もらってもいいよな？」

「ベニー無事か？」

「機材がメチャクチャだ！新調しなきゃストを起こすぞ！」

「おお…今度も俺生きてる」

「そうだ！ヤハ！？甲板に出たまんまのヤハはどうした！」

「お、おい皆行くぞ！」

「ヤハ！」

『……………』

そこで見たのはこひるがこっちを向いて「寝ているだけです」といっているのと。

「…んん…」

外れた魚雷固定環に引っ掛けて服が破れてその拍子に頭をぶつけた、殆ど全裸で気絶中ののや八だった。

「なんつつか」

「…だな」

「いや、これはこれは」

「やばいくらいに」

『エロいな』

「皆さんよくわかってる様で」

こひるが満足そうにうなづく。

「まあ…天使みたいのがいたらそりゃあ、同性に走っても仕方ないかもしれん」

「さすがにこれを見てホモがきもちわるいとかいえないなあたしや」

「僕この写真とっていいかな」

「いや、さすがに駄目だろ？俺は普通だ俺は普通だ…でも普通の奴でもヤハがエロくみえるのか？…いやいやいや（ブツブツブツ）」

ダッチが納得するように腕を組んで頷きまた見つめ、レヴィも頭を掻きながらも視線を外さない。

ベニーはカメラが無事なのを確認し、ロックは日本人としての葛藤に悶えていた。

後日、こひる曰く。

あの時の、ヤハ…千早様の周りには薔薇と百合が同時に幻視できました。

だそうだ。

ちなみに寝ている間になんとか（…）ラグーン商会に身をおけることになったらしい。

…ロツクの台詞が聞けなかった。

『俺はもう死んでいるんです』…だっけ？聞きたかったなあ。

なんとかってなんだと後でダツチ聞くと、

「いや、バラライカ…取引先の女の名前なんだが…気絶していたお前を見ていきなり見たこともない様な蕩けた顔になりやがって…欲情し始めたんだよ」

「へっ！？欲情？」

「それでな『この子頂戴』とか言いやがったんだ。近くにいた軍曹とか口をあんぐりと開けて呆けてたぜ。…んでまあ俺達三人が先に雇ったって言い張ってなんとかだ。…知らない天井じゃなくてよかったなヤハ」

「何でその台詞を…まあいいや。」

「ちなみにまたすぐに商会に会いに来るってよ…理想の男の娘だそうだから」

「…字違うよね？子だよ？気のせいだよ？ねえ？ねえダツチ何とか言つてよ…そんな申し訳なさそうな顔してこつちを見ないでよ！ダツチってば！」

「…避妊具は忘れないでね？常に携行しておいたほうが身のためだ

よ？」

「！?...べ...ニー...？」

嘘だよね。嘘だといってよバーニィ（ベニー）！！

拝啓、母さん、姉さん。

もしかして僕の原作介入ははやまったことをしたかもしれません。
もしかしたら汚された体で帰ることを内緒にすることをお許しく
ださい。

第03話（後書き）

姉御もキャラ崩壊させてしまつかもしれません…もう遅いか。
やっちまっただねE

第04話（前書き）

新要素入ります。まあもともと入れるつもりでしたけど。
能力の謎が解けます。

俺は！自分が満足するまで！書き方を！曲げない！

第04話

夢にはすぐに夢だと気づく夢と、覚めてから夢だと気づく夢がある。人によって自覚夢は、夢の体現が可能な幻想郷（理想郷）。しかし、てけて現実にはならない理想郷（幻想郷）。

僕もよく夢の中で大空を、宇宙を、全てを両手を羽に飛び回ったことが何度かある。

今回はすぐに夢だと気が付いた。胸が高まった。そして同時に違和感を感じ、さらに胸が高まった。

僕の夢には設定シナリオがなかった。いつも理想郷（幻想郷）の箱庭を遊びまわるだけ。

僕には許されない、いつ許されるのかわからない無邪気という、罪を持って。

その箱庭に違和感。そう、今回の夢には設定シナリオがあるという違和感だ。

何が出てくるのだろう。

何が出来るのだろう。

何を見るのだろう。

何を感じるのだろう。

そして、誰がここに訪れたのだろう。

白い霧の中を僕は歩く、周りは何も見えない。ただ、こっちに進めば物語が進むだろうという勘と確信で進んだ。

くぱあ…。

目の前の空がいきなり開かれる。中には無数の目。眼がこっちを見ていた。

睨むでもなく。嗤うでもなく。笑うでもなく。晒うでもなく。

ただ、観察するかのように。

ここから先は―ユメデハナイ―

ふと、どこからか聞こえてきた声があった。夢ではない？解らない。分からない。

ただ、この無数の眼がこちらを見つめる紫の入り口に入らなければならぬと、何らかの強迫観念があったのは確かだった。

「こんにちわ、こちら側の人間」

「…久しぶりねアキラくん…いや今はチハヤくんかな？」

2人の女性がいた。一人は少女と云っていい身長だったが。なぜか彼女は少女とは思えなかった。

「悪いと思っただけど貴方の睡眠時における無意識下…まあ夢ね。夢の中に境界を一時的に繋がるように弄らせてもらったわ」

「どうやら思った通りに成長しているみたいだし…ねえ？」

何が何やらわからないがどうやら2人…いや正式には少女の方が僕に用があるようだ。

「あら、さすがに鋭いわね。そうよ、私は八雲 紫。しばらく前に私の領域に逃げ込んで来たこの子に協力する形でここにいるわ」

「そして私がルサルカ。覚えてないだろうから言っわ、ルサルカ・シュヴェーゲリン。ねえ、君に…伝えたいことがあるのよ」

まあ…貴方が誰かを聞いてから…かな？
知識上知っていてもどうだかし…。

「そうよね〜いきなり聞いてはいそうですね、なんていく訳がないわよね〜。」

彼女は、そうねえ…どこから話せばいいものかしら？と少し楽しそうに云った。

「ねえ、君は覚えてる？アフガンの戦場で『ふひひ〜！俺は神に選ばれたオリ主なんだあ！目指すはチート！ハーレム！俺TUEEE E E E！』…って言ってたキモイ奴。」

私あいつに捕まってたのよ。『うひっ！なんでカルサルカたんめっけ！ハーレムへの第一P O O O ！！』とか訳わからないことを言って…まあ、あいつがピンクのトランクス下ろす瞬間に後ろから君に後頭部撃たれた後、死なないのに吃驚してバラバラに切り分けて燃やされ、C4爆薬で跡形もなくなってたけど」

その時助けられたのがあ・た・し。

と彼女は僕の唇に人差し指をちゃんと当てて言う。

…ああ、そういえばそんな奴いたような気も…『なぜだ！なぜ！俺様が…！？貴様！転生者か！？』とかいつてたかも…50口径が後ろから貫通した顔で。

あいつの言っていた意味、今ようやくわかった様な…分かりたくなかったような。

………つてああ！あの時のしばらく一緒に行動した魔術師の女の子ですか！？

「そう、その子。本当の姿がこれなんだけどね、どう？あのあと教えた魔術は使えるようになったかしら？」

使えるようになったのは灯火と治癒、解析…ギリギリで操影ですね、他はまだあまり。

「うんうん！それだけ使えれば充分！あとはまた追々やっていけばいいわよ…それでなんだけどね」

ん？本題ですか？

「君に飲ませた銀のカプセル…覚えてる？」

はい、あの魔術の基礎だとか言っていた秘薬ですね？

「実はそれ、本当は『聖人の銀聖杯』っていわれる記録にも残っていない聖遺物に、私が所持していただけで使用不可な多数の聖遺物を内包したものなのよ」

「あ、聖遺物って云うのは何百何千何万と人の魂を吸った物の総称で、エイヴィヒカイト永劫破壊って云う秘術を使用可能にするためのものよ。

なんでか一度死んで目覚めた時、身体の中に知ってる物はほとんどあったのよ…制御できないし、苦しいし。そんなときに出会ったのが一目で適性が高いと思った君」

「だから、助けてくれた御礼に全部あげたの。ちなみに君が『自由自在な銀を操る程度の能力』って呼んでいるものだけど…実は『活動』エイヴィヒカイトっていう永劫破壊

の第一段階でもあるのよ…まあ『活動位階』で『形成』も可能なんて、特殊だから分からなくて当たり前でしょうけど…多分紫がそこらへんの境界を面白半分に弄ったりしたのが原因でしょうね」

……。

「ん？どうしたの？」

僕は頭を抱えた。生前にDies iraeに関わっていて、さらに知らないうちに聖遺物使いにされていたのか…と。

「あゝ…でも騙した訳じゃないの。その『聖人の銀聖杯』ってね、望めば銀が湧き出しさらにある意味なんでも中に注げる、すなわち内包できるというものらしくて、過去の聖人たちは

皆、その劣化品に通常注げるはずのない天使の血を注いで飲み干すことを通過儀礼としたの。だから私は、魔力と知識、センス…ついでに多数の聖遺物を注いで

器ごと君に飲ませたわけ」

なんかついの方が多い気がするんですが…。

「わたしにとっては前者の方がついでなもの」

…そうですか。

「多分『形成』と『創造』はそれぞれの聖遺物を使えると思うわ。

君の渴望はそれらを使いこなせるほど魅力的でかつ言葉にすることの難しいことだもの…まあ数が多い分修得は難しくなるでしょうけど暫くは『聖人の銀聖杯』の『活動』だけでも十分でしょ？」

…なぜこのことを僕にいまさら？

「君はこれからいろんなことに巻き込まれるから。もちろん命の危険にも遭うことも多いかもしれないわ、だから遠慮なく使って欲しいの。これは君に死んでほしくない私の我儘」

…はい、有難うございます。

「もう時間ね…ルサルカ」

「うん…分かった。それじゃあねちハヤ君！縁があつたらまた会い

ましょ！」

夢が目覚める。しかしこれは夢ではないことはすでに知っている。懐かしい顔に出会ったものだ。

それにしても…だ。

「おいロック。さつさと起きろ水兵！仕事だ！…ヤハ？どうしたそんなパンドラを開けたような顔してよ」

「…」

「まあいいや。じゃあ仕事いつてくるから弾の生産、頼んだぜ」

「うわっ！待ってくれ！…ヤハ。じゃあ行ってくる」

「あ…行つてらっしゃい」

ここにおいてもらうための仕事として割り振られたのがレヴィの力バーと弾の格安提供だ。

今日の仕事はこの前使用した魚雷の複製を1つ済ませること。後はレヴィの弾丸だ。

いまからラグーン号に行つて1つを解析後取り掛かるのだが…。

「はあ」

2話連続だがあえて言わせてもらつ。聖遺物使いとか…勘弁してください。

嘘だといってよバーニィ。

第04話（後書き）

いまでも思う…。なぜルサルカートはないんだ!?

千早「…どうでもいいよ…で結局この銀は活動なの？程度の能力なの？」

両方です。スキマが境界をなくしてしまったので。

…やる気になれば弾幕とかスペカ張れますよ？

千早「やらないからね？」

第05話（前書き）

投稿速度が遅すぎる…。しかしできるだけ頑張ろう。
今回、要素追加のきっかけの回

第05話

僕は一通り心のバーニーに愚痴ることと何か持ち直した後、こひるを探した。

$$\begin{matrix} \lceil \\ \vdots \\ \langle \\ \rangle \\ \vdots \\ \langle \\ \rangle \\ \rfloor \end{matrix}$$

「だからなんで」

君は僕の胸元に入っているのかな？

半ば諦めながらも動かなければならないため、こひるの頭を指で撫でる。

ちよつと強めにぐりぐりと。

「こひるゝ？お昼寝は終わりだよゝ仕事いくよゝ」

「あううううううう？？？おおお起きますう？？？」

可愛いなあ。

二人で支度をして外に出る。

皆が出てまだ間もない。

時間は… ちょうど昼時だ。

「ヤハ様、お昼どうしますか？」

「うん……中華にしようか？」

幸い、逃亡者の集まる町みたいなのところだから国際色豊かである。

新しい料理は覚えられるし、たまにここにあるのが信じられないほど美味しい料理もあったりして楽しみは尽きない。

危険？前世ですでに裏表両方の最悪を渡り歩いた僕がこんな街中でやられるとでも？安心してください。ないですから。

そんな風に思いながら良さそうな店に入ろうとして

「チツ！邪魔だ餓鬼」

「あら？」

白いスーツに赤いシャツのブサイクが僕を押しつけるように出て行った。

「…こういうのだけは好きになれません」

「ヤハ様、お怪我はありませんか？」

なんかどっかで見たような…？

ついでに頼まれていた買い物をして市場に出る。僕が来るまでは殆ど出前だったらしいが、僕が料理を振舞ってから、僕や興味を持ったダッチとかが作るのが多くなってきた。

後は酒や缶詰、僕の趣味で寄り道したりしていた。

「あ、これ。前ロックが買ってきたまづいの」

「…なんでこんなところにドリアンがあるのですか？」

「おい、エリーゼ。探したぞ！」

そんな風にしていたらいきなり肩をつかまれた。
誰？エリーゼって？

「ちよっ！！ミラ！エリーゼはこんなに身長高くないって！ああもう、すいません邪魔しちゃって」

…なんだろう。子供を搜してるみたいだけど…。
こひるに目を向けると同じく気になったみたいだ。

「…あのどうしたんですか？お連れさんが迷子にでもなられましたか？」

そう聞くと言い合っていた二人は思い出したかのようにこっちを向いた。

「ああ、すいません。私、チハヤ・キサキノミヤと申しますこの子は」

「こひると申します」

そこまでいつとどうやら男の子の法が合点がいったというふうに声

を出した。

「あ、すいません。僕、ジュード・マティスっていいいます」

黒髪の男の子が言っつて、ところどころ髪の色が違う女性に視線を移す。

「私はミラ。ミラ・マクスウェルだ…すまないが、君達に聞きたいことがある」

「なるほど」

近くのカフェに座り僕達はジュードさんからことの顛末を聞いていた。

リーゼ・マクシアからエレンピオスにジュードとミラ、エリーゼの三人で移動しようと思っていたそうだ。だが出てきた町はいつもと違う町でさらにはいきなりの人波でそのエリーゼという子が離れ離れになったそうだ。

…町の名前？とか凄く気になるけど絶対に聞かない。

まあそれが先ほどの市場の近くだったのでこうして探しているという。

「では早急に探すと致しましょう。なにせここは悪の吹き溜まりのような町ですので、危ない輩に攫われたとしたら大変ですから」

「えっ!？」

「なんだと!？」

そして立ち上がり走り出そうとする二人を止める。

「待ってください。むやみに探しても駄目です…こひる、音声：小さな女の子、悲鳴を優先」

「はい…『禁じ手 探り箸』」

1分程二人を宥めながら待っているとこひるが反応した。

「チハヤ様!すぐそのホテル3F東側から少女と思われる悲鳴と2名の男の声です!」

「ありがとうございます!二人とも!いきますよ!」

そして僕は走り出し、

「ええっ!」

「ほう、やるな」

先行するためホテルの裏路地から三角とびで開いてる窓に飛び込んだ。

「方向は!？」

「その…右です!」

バアン!!

言われた扉を掌底で吹き飛ばす。

「!?? 誰か! 誰か助けて!」

「な、なんだてめえ!」

「おい邪魔だ! そちらこそ!」ガフツ!?

入り口付近でビデオカメラを構えていた奴の顎を左で打ち抜き、ベツトを見る。

そこには抵抗中であろうやや乱れてはいるが服を着たままの少女―特徴は聞いているから多分エリーゼ本人―に押し掛かるようにしている全裸の男。

良かった。間に合った。

ほっとしたのもつかの間男に近寄り回し蹴りで壁にたたきつける。男は声も出さずに気絶したようだ。

「大丈夫ですか? エリーゼさん? ジュードさんとミラさんもすぐ来ますよ」

「あ…ありがと…も、もう…駄目かと…ふええええええええええん! ! ! ! !」

安全なのがわかるとエリーゼは緊張が解けたのか僕に抱きついて泣き始めてしまった。

仕方なくそのまま背中をポン、ポンと叩いてやる。

「…こひる」

「大丈夫です、怪我等ありません、乙女の証も無事です」

「…そう、ありがと。…本当に無事でよかった」

バン!!

『エリーゼ!!』

「ミラ！！ジュード！！この人が助けてくれました！」

そういいながらまだ僕を抱きしめているエリーゼだった。

「ってティポ！？大丈夫！？」

「ううゝジュード君ゝ。こいつら僕をグルグル巻きにしてポイツて投げたんだよゝ」

…エリーゼの私物らしい人形が浮いて動いて喋り始めた。
うん。こひるもいるし…まあ、いるのでしょうね。

「あれと一緒にしないでください」

なんかスイマセン。

「それではな、いろいろと世話になった」

「チハヤちゃんがいてくれなかったらと思うとゾツとするよ…本当にありがとう」

「ジュード！チハヤは男ですよ！胸がありませんでしたから！」

「わーエリーゼ！そんな人が気にしていることを「私…男です」ウソオ！あ、いやごめんなさい！」

エリーゼはいい子だと思った。なにせ一度で僕を男だと見破ってくれたから。

「エリーゼさん、この町は危険ですから、気をつけてお帰りなさい。」

膝を折りエリーゼに視線の高さをあわせて微笑む。

人見知りなのか、もじもじして赤くなりながらもコクン、と頷いてくれた。

と思ったら

「んっ」

「んむっ!?!」

「あああああゝ!!!!!!」

僕の唇にキスをしてきた。

こひるは悲鳴を上げている。

エリーゼの向こうにいる二人はなにやら苦笑していた。
…目は驚きを隠せないでいたが。

「大好きです! チハヤ!」

「僕もだよ!」

「…え、うん、ありがとう」

そしてそのままミラさんの後ろに隠れてしまった。

「…ははは、どうやらまた会うことになりそうだな」

「そう…みたいだね。チハヤ君、じゃあまた会うことがあったらね」

「うん、それじゃあ3「僕は」?」∴4人とも」

『また会おう（会いましょう）』

また会えるといいなとか色々思いながら分かれる。

それにしてもマクスウェルって性珍しいですねえ。

もしかして本当に精霊王だったりして。

∴ なわけないか。

「ふう、こんなものかな?」

「お疲れ様ですヤハ様」

船の倉庫で魚雷を複製したあと事務所に戻って弾造りに励んでいた。

今造った対戦車ライフル（ゲパード）の弾を一つ一つチェックしながら、こひるが入れてくれたお茶を飲んだ。

もう技能が成長している。弾を一つ作るのに拳銃弾からライフル弾まで1秒もいらなくなってきたし、効率も良くなったのか魔力消費も微量、

疲れも溜まらなくなった。これもラーニングの恩恵だろう。

ドンドンドン

「おーいやハ、開けてくれ」

ドアを叩くダツチの声、あれ？早すぎませんか。
まだ5時、帰るのはもっと遅いと思っていたからご飯用意してないや。

ガチャ

「お帰りなさい皆…って疲れた顔ですね何があつたんです？」

「おうただいま…いやなに予想外のことがあつてなあ…」

なるほど。

…あ、思い出したあの中華店にいた奴、陳^{ちん}だ。
このあとバラライカさんに爆発させられる。

「今日の仕事がな…畏だつたんだよ。俺らを殺そうとする…な」
「まあ、あたしが全部沈めたけどな」

多分ルアクのことだろう。

僕は納得したと頷いて、用意したコーヒーをダツチに渡した。

「あゝあ骨折り損のくたびれ儲けだ、バカバカしい」

「いいじゃないの、犬に噛まれたようなもんさ…あ、こひるちゃん
機材チェックてつだつてくれるかい？」

「はい、ただいま」

レヴィの愚痴にベニーは気にしないように言う。
そんなレヴィの元にもコーヒーを入れて持っていく。

「なあヤハ、お前グレネードの弾複製できるか？今日、クソ野郎のケツの穴に嫌って程ぶち込んでやったから結構減ったんだよ」

「あ、はい大丈夫だと思います」よくしお前サイコーだ。ていうか今からあたしの癒しになれ」レ、レヴィ！？わぶっ！？」

疲れきったレヴィが僕を引き寄せて抱き枕にしだした。
それを見たロツクは乾いた声で笑っている。

「あはははは…なにやってるんだか RRRRRR あれ、電話かな？…はいラグーン商会…あ、少々お待ちください——」

「…いいな俺もヤハ抱きしめてえ（ボソ）「ダッチ？」！？ん！？誰だ？」

「バラライカさんだよ（って聞こえてるし）」

…何かロツクに哀れむような目で見られている気がする…そしてなんか身に危険を——。

「ほれほれほれ…ここか？ここがいいのかヤハ！」

「あ！いや！だ、駄目！そこは…らめ！」

っていうか現在進行形。

なんで僕こんな声出るんだろうっていうかレヴィが壊れ始めた気がする。

「そいつはクールだな」

「ダ、ダッチ、仕事の電話かい？」

ロックがこつちを向こうとしたダッチを遮るように立って話しかけた。

「まあな、ちょっとばかり景気のいい世間話をしただけさ」

そしてダッチは周りの皆を見渡した。ちなみに僕はもう服を着直した。

「レヴィ、ロック。この後用事は？」

「ないね」

「特にねえな」

「ベニー」

「機材のメンテナンスだけど、別に急ぎってわけじゃない」

「ヤハ」

「今日のノルマは終えました。お仕事終了です」

各人の用事なしを確認したダッチはこう提案してきた。

「よし、諸君。今日の営業妨害による精神的損失を鑑みて…あとヤハの歓迎会。雇用主の俺としては、娯楽提供の義務がある。さてそこでだ」

ダッチは立ち上がる。

「『イエロー・フラッグ』へ繰り出しての痛飲つてのを提案するぜ。もちろん俺持ちだ、行く奴は？」

「朝までコースはありなのかよ。ダッチ！」

「わぷっ！！??」

それを聞いてレヴィは喜色円満の顔でまた僕を抱き寄せる。

「じゃあ僕も行くよ」

「あ、なら俺も……」

「ぷはっ私もいきますよ」

「ヤハ様がいくなら私も」

「ベニー決まりだ、車をだしな！ロック！仕事じゃねえんだ、あのアロハを着て行けよ！！ヤハはこの前見つけたこのゴスロリって服だ！！」

「ええ〜」

「なんでそんなの選ぶんですか！？」

ええ、結局フリフリのゴスロリ着ていきましたとも。
自棄になって呑みまくりましたですよ。こんちくしょう。

追伸：ナンパがとても邪魔でした。レヴィが追っ払ってくれましたが。

第06話（前書き）

仕事忙しい…っていうのはこの場合言い訳として成り立つんでしょ
うか？

頑張らせていただきます。

第06話

今日は一日オフだ。

能力を使いこなせるようになったからなのかは分からないが、今月のノルマすら終わってしまったので、ダッチに次の仕事をもらおうとしたらこうだ。

「…そいつはいけねえな。確かに効率よくできるようになったから早く終わったのは分かる。…だか余りにも早すぎだよヤハ」

「大体、いままでそっちの仕事のほかにも緊急で無理言ってレヴィのサポートは行ってもらったりしてドンパチまでしてもらっている」という訳で雇用主として明日一日ヤハはオフだ」

「明日以降は俺達の仕事についてきてもらって臨機応変に動いてもらう。それで来月分はもつとゆっくりでいい、休みながら、片手間でも間に合わせさえすればいい」

と、言うことだ。

仕方ないので皆を見送り（今日はカルテル―マフィアみたいなもの―からの運びをやるらしい）、その後は武器の手入れ、聖遺物の確認、軽く稽古の後、イエローフラッグで呑むとしよう。

サムライエッジとソードカッターを分解、銃身内部や機構に残っているガスを残らず落とし、油もさす。バネが弱っていないかを確認して結合。

「…よし」

ホルスターに挿して、

ババツ!!

一気に構える!

その後、機能点検をしてからまたホルスターにしまって脇においておく。

「あたっ! ヤハ様!？」

「あつごめん! ていつからそこに?」

いつの間に銃を置こうとしたところにこひるがいた。

「いえ、お茶が入りましたのでお持ちしました、あとアップルパイも」

「ああ、ありがとう」

時計を見る…午前10時、ちょうど休憩時だ。

「…こひるの分もあるでしょ?一緒に飲もう」

「はい!」

お茶も終わり、次は聖遺物の確認をすることにした。
したのだが……。

「え」と罪姫・正義の柱血の伯爵婦人辺獄舎の絞殺縄闇の賜物
スルース・ワルキシャルラッハロート ヴェヴェルスフルク・ロングヌス ロンギヌスランゼ・テヌタヌンホクス・マキナ
戦雷の聖剣緋々色金黒円卓の聖槍聖約・運命の神槍機神・鋼化英雄
テア・フライシュツェ・サミエル
極大火砲・狩猟の魔王…ほぼオールじゃないですかに考えている
んですかるサルカさん…」

というよりいままでこれだけ僕に入っていたのに平気で暮らしていたのか… どんだけ適性高いのだろうか、ルサルカさんは数が多すぎるし使えないから邪魔だし苦しくなると、
いつていたが確かにコレは納得だよ。

むしろいままでよく正気を保てましたね貴女… きっと彼女も転生時に何か理不尽にチートになってしまったのだろうか？

まあ仕方ないので片っ端から形成を試すことにした。
イエッツラー

適正が高いとのことだったけどどの程度使えるのか見ておきたかったからだ。

こひるは見学。

「形成… 罪姫・正義の柱！」
マルグリット・ボア・ジュステイス

「！右腕が巨大な鎌みたいに！？」

原作どおりのようだ。

「形成… 血の伯爵夫人！」
エリザベート・バードリー

「… ヤハ様の影からアイアンメイデンとか鎖とか出てますけど？」

ルサルカさんと同じ事象展開型（武装具現型に近い特殊発現型？）らしい。本もあるし。

「形成… 辺獄舎の絞殺縄！」
ワルシャワ・ゲッター

「…指先から出る…鋼糸ですね」

原作どおりつと…使いやすそうだね。感じたところ、引きちぎられてもダメージは無さそう。

まあ僕の聖遺物は銀聖杯だからかな？

「形成…闇の賜物！…なにこれ？」
クリフォート・バチカル

「…杭ですね…硬くて大きくて黒光…はいそこまで」

手の上に大きな杭が現れる。投げるだけじゃなくて複数使用、空中停滞、射出なんかもできそうだ。ソードバレルフルオープン的に。

「形成…戦雷の聖剣！」
スルーズ・ウルキユレ

「おゝ青白く雷を纏った綺麗な剣ですね」

原作（以下略）

「形成…緋々色金！」
シャルラツハ・ロート

「別属性…炎の剣ですね、見たところ古い形です」

「形成…黒円卓の聖槍！」
ヴェヴェルスブルク・ロンギヌス

「黒いハルバート？方天画戟に近いですね。なんか模様入ってますけど」

確か人によって形が違っただけ？
ブリアー創造も。使い続けても屍兵にはならないようだ。

「形成…機神・鋼化英雄！」
デウス・エクス・マキナ

「…！威圧感が半端じゃないです！早く消してください！」

黒い瘴気を纏った機械拳なんだけど…気の弱い人だと失神しかねないよコレ…。

「形成…極大火砲・狩猟の魔王！…デア・フライシュッツェ・ザミエルこれもなに？」

「じゃなくてそれも威圧感が危険です！？消してください！気づかれないんですか！？」

右手に嵌った六角の柱…砲塔？見た目東方のヤタガラスみたいなのが出てきた。でもほかにも確か応用利いたような…列車砲とかパンツァーファウストとか。

ん？あとひとつ？さすがにラインハルトの聖遺物なんてホイホイ出せるわけないよ…訂正、出したくない。

「…疲れたよ…」

「…本当にこれ前世から持ってたんですか？」

「そうらしいよ…」

ちなみに一つ一つがすでに大量の魂で強化されていた。ギロチンのぞく…もしかして…マリイいる？

いや、ない。フラグですとかいわなくていいから。

よし、稽古しよう 現実逃避

僕の基本戦闘法は、銃を撃ち、近寄られたら居合いで切り捨てると
いうのを前世から行っている。

だから居合いの練習と銃のクイックチェンジ、後は不意を突かれた
場合のため（といっても10回もないが）ガンカタを中心に格闘を。
休憩と昼食を挟んでみっちりやった。

そして午後5時。夕食をとってから家を出た。

「さあ、イエロー・フラッグ行こう！」

「まったく、ヤハ様は…結局オフなのに余り休んでないじゃないで
すか」

「まあまあ…それともこひるはいかないの？」

「…いきます」

鍵の閉め忘れはないですね？それではいざ繰り出しましょう！

なんてときもありました。

「へえ、そうなんですか…大変ですね」

「はい…しかしそれでもやらねばなりません…それにしても貴女は
ここにいる人に比べてとても品がよい…一体どこの誰なのでしょう」

ね？」

「いえいえ私なんて、家がつぶれてここに流れてきただけですので

…（す、鋭い）」

「ではこの…どこかで見たことあるようなサポートエンジェルは？」

「わ、私ですか！？いえいえ私はいわば複製品みたいなものですよ

…（く、苦しすぎます）」

隣に座ったメイドさん…ロベルタと気づいたら1時間近く話し込んでいました。

しかも凄い興味もたれて。

第07話（前書き）

後々多重クロスしすぎてグダる可能性大。

第07話

まあ本当はもつと遅くにロベルタは酒場につくはずだったのだが……僕達が珍しかったのか話しかけてきてそのまま目的地に決めたのだろつ。

「案内してください」

となれば強制について来られたのだ。

僕だって本当はすぐにでもレヴィが機嫌悪く来るものだと思っただのに……。

結局1時間も話し込んでしまったのでした。

……あと正体ばれたっばいのです。はい。

後は原作では分からなかったが彼女、すでにこの時点で薬に頼らざるを得ない体だったらしく、分かりにくいが体が震えていたり中毒症状がでていた。

まあ、そういう兵士が薬に漬かってしまうと何かで読んだ気もする。

……というより何気に僕、ディエゴ・ラブレスさんと数年前に知り合っていたりする。

彼は何やら知人に呼ばれたらしく、僕は射撃に行ったとき。

両方共会ったとき暇でなんとなく茶飲み話をしていたらお互いの立場が分かってしまったと。

……なにそれ？スキルにでもなんか追加されてるの？「最低でも知り合いフラグ作成」とか？

いいや、無いよ。ないと思いたいよ。

……まあ、あの時は『あの』ディエゴ・ラブレスだとは思ってなかった

たから仕方ないのかもしれない。

できればこの人は何とかしてあげたいと思う。

原作は途中だったが、あの様子だともう何もかも手遅れだと思うし、普通に会うのもコレで最後だろう。

…あ…お手洗いいきたい。

「あ、ロベルタさんちよっとお手洗いに」
「どうぞ、お構いなく」

『ヤヤヤ、ヤハ様！！』

「へうつ！？何！？いきなり何！？」

お手洗いで用を足していたらいきなりこひるに念話をつなげられた。
しかし文句を言う前に連続した銃声。

慌てて戻ってみるとなんとタイミングの悪いこと。

「生者のために施しを、死者のためには花束を」

レヴィが撃たれる前の科白でした。

「ちよっ！？」

考える前に体が動いてしまった。

「正義のために剣を持ち、悪漢共には死の制裁を。しかして我ら――
――聖者の列に加わらん」

「ヤハ様！？」

死なないのは分かっている、と思いたい！けど、銃弾だ！原作とは違いもしかしたら当たり所が悪くなるかもしれない。

「ロベルタさん！駄目です！！！」

「サンタ・マリアの名に誓い、すべての不義に鉄槌を」

直前、レヴィとガルシア君を本来の出口のほうへ突き飛ばし

「ヤハ!？」 「うぐっ! ヤハ!？馬鹿!！」 「ヤハ様!！」

T T

「う！がああ！」

「!!!???ヤハさん!?!」

ロック、ベニー、ダッチが驚き、なぜ突き飛ばしたとレヴィが睨み、こひるが叫ぶ。

被弾したのが僕だと知ると少し反応するロベルタさん。

銀を使う暇の無かつた僕はそのまゝ壁に叩きつけられる。

被弾箇所左肩、右脇腹、左大腿部の計3発。

動けないことは無いけれど、追いかけるのはできないかもしれない。

なんてことだ。いくら死なないとはいえコレでは足手まといだ。

「馬鹿野郎！無理に動くな！早く逃げるぞ！」

そういつて僕を抱えるダッチさん。少し休めば多少は動けるはずなのでおとなしくすることにする。

「この馬鹿無茶しやがって！」

「ヤハ様！しっかりしてください！！」

車に乗せられるとレヴィとこひるに応急処置をされた。

二人とも咎めるより心配の色が強く出ていたのが分かったので申し訳なかった。

こひるはともかく、レヴィまで泣きそうになっているのには悪いけど本当に吃驚した。

そういえば結局ラゲーンで一番仲良かった気がする。

「伏せる！！」

ダッチの声で後部座席に乗っていた僕はレヴィに強制的に頭を下げさせられた。

とても痛いです。どうやらもうロベルタさんが車に取り付いた様で撃ち合っているようだ。

…どうでもいいけどよくあたらないですね？両者とも。

と思ったら

「港だダツチ！なんてこった進入禁止！！」

「袋小路だチクショウ！！」
デッド・エンド

「や、やばっ！！」

そのままの体勢（屈んだままの僕）でコンテナらしきものに衝突。

首がグキツって逝って気絶しました。

最後にレヴィが「あ…ヤベッ」といったのが聞こえました。ずっと頭抑えっぱなしだったんですね。わかります。

「んん…」

「ヤハ様！？」

銃声に目が覚めると目の前に大粒の涙を流したこひるがいた。

どうやら車内の後部座席に寝かされていたようだが、他のメンバーがいない。

降りたのだろうか。

怪我の具合は…さすがラーニングとっておこう。さらに自動機能なのか、『銀』が包帯のように貫通箇所を覆っていた。

まあ軽い切り傷程度なら5秒もしないうちに直るが、やはり5・56mm弾では時間がかかるようでまだ満足に動くには足り無そうだ。この分だと、銀聖杯以外の聖遺物の活動は発動しないらしい。

ガチャン。

「お、起きたか」

「だいじょうぶかい？」

「二人とも軽いな！？」

「…この人…どこかで見たような…」

「あはは…大丈夫ですよ」

車を降りるとすぐ傍にいた4人を確認した。

車は最後に見たのと同じようにコンテナに突っ込んでいる。

余り心配してないのを見ると、銀が覆っているのを見て『ああまたオカルトか』と思ったからだそうだ。

さすが、慣れるのが早い。

「…レヴィはどこですか？」

「そ、そうだった！ヤハを撃たれたからってレヴィ、カンカンに怒っちゃってロベルタに喧嘩売りに行っちゃったんだよ！！」

そう聞くとダッチとベニーは苦笑い、ロックは思い出したように慌てた。

さつきから距離をとって撃ち合っているのは二人というわけか。

二人を見ていると隙を見たレヴィがロベルタに体当たりを仕掛けそれに反応したロベルタごと倒れ、お互いに銃を突きつけた。
とその時だった。

「動くな！その辺でやめておいたらいか？お二人さん」

スポットライトで照らされ出てきたのは銃を構えて警戒している無数の兵と…バラライカさん。

…いい人なんだけど、会うたびに抱きついたり、抱きしめたり、飛びついてきたり、キスしようとして来たり。

…いい人なんだけど！酔っ払って家まで送る羽目になって寝室に連れ込まれそうになったり（付き添いの軍曹さんに助けられました）

…やばい震えが、忘れる僕、今はそんなことを走馬灯（思い出）している場合ではない。

場の空気を支配したバラライカさんが続ける。

「いいことを教えてあげる、メイドさん。私たち『ホテル・モスクワ』は最初からマニサレラ・カルテルと戦争をするつもりだったの。タイの受け持ちは私の役目だったけど…あなたのお陰で手間が省けたわ。今頃は本拠地も——壊滅しているはずよ？」

「地球で一番おっかない女の上位3人だ」

「グラウンド・ゼロ^{キリッ}って気分だぜ…そして地球上で一番の癒しはヤハだ、マジ天使」

僕も普通に生まれていたらそう感じていたかもしれない。というか男衆が縮こまっているんですけど。

そしてダッチ、正気に戻って。いくら女が怖いからって僕をそんな目で見ないで！！

「天誅^グデス！」

「がふっ！？」

そんなダツチにこひるが延髄をとび蹴りし気絶させる。ナイスです、こひる。

（恐悦至極、です）

まあそれは置いておいて。

バラライカさんのターンは続く。

「だからすべてはノー・プロブレム。ガルシア君が攫われた件も全部チャラ。戦う理由はなくなつてよ」

「関係エねえだろ」

「……ですわ」

「あらそう？」

パアンパアンパアン！！！！ゴゴゴツ！！！！

バラライカさんは言葉を切つて捨てた二人の言葉を聞くと、取り出した拳銃で二人の銃を弾いた。

「カン違いしないでね？お願いじゃないの、命令」

その言葉に今の状況で逆らえる二人ではなかった。

「ロベルタ…もういいんだよロベルタ。僕はこのとおり怪我してないよ？ねえ、もう帰ろう？」

ガルシア君がロベルタに話しかける。

「同感だわ坊や。でも――」

バラライカさんもそれに同意するが。

「獵犬のほうはどうかしら？」

「獵犬……？」

ロベルタの顔が凍りつく。

「おや。坊やはご存じないのね、こいつは「だまれえッ……！」
静かにしてろ、『獵犬』」

叫んだロベルタの眉間に銃を突きつけて黙らせ、バラライカさんは続ける。

「こいつはね、使用人なんかじゃないの。」フローレンシアの獵犬
”、ロザリタ・チスネロス。キューバで暗殺訓練を受けたFARC
の元ゲリラ、誘拐と殺人容疑で国際手配中。

テグシガルバの米大使館爆破にも関与が疑われている筋金入りのテ
ロリストよ」

「あ、その事？前に父さんから聞いた」

「は？」

「え？」

「ん？」

「あらそうでしたね」

バラライカがタバコを落とす、ロベルタがポカんと、僕は納得が
いったので頷いておいた。

「なんだ？ヤハが関係あるのか？」

ダッチが聞いてきたので僕は頷いた。

「もうバラライカさんやロベルタ、ベニーは感づいていると思うけど、僕は日本の鍋木グループ分家、御門の長男、千早です」

「やはりか」

「どこかで見覚えがあると」

「そのサポートエンジェルは御門の長男愛用って噂だしね」

3人が納得言った顔をする。

ダッチやレヴィ、ロックは固まっている。ロックなんか「親会社の実質トップ任されてるお方じゃないか！？」なんて真っ青になっている。

「…いや、普通はそうはおもわねえよ、金持ちのガキがあんな高い戦闘技術持っているって誰が思うよ」

復活したレヴィがそう聞いてくる。

「まあ普通はそう思いますよね。僕とこひる、後家にいるメイド見習いは以前事件に巻き込まれたので自然に覚えざる終えませんでした」

それだけじゃないがそういうことにしておく。まあ史も立派にメイド服で機関銃を振り回せるようになりましたし。

「事件？事件ってなんだい？」

「ラクーンシティのバイオバザード」

ベニーの問いに答える。

「…姉御、あれって生存者いないんじゃない？」

「バカだね、感染した町ごと消されそうになったら逃げるだろうが普通」

「流出した情報だと生き返った死人が人を襲う以外にも、アンブレラ社が裏で開発していた生物兵器も暴れていたそうじゃないか…よく無事だったな」

続いて、よく分かっているようなレヴィ、強い男だ、と僕を見て満足そうにみるバラライカさん、呆れているダツチ。

「あれ？そういえばその時期に結構御門傘下の会社で逮捕されているのが多かったような」

「あれは何を考えたのか千早様のレポートを持ち出してアンブレラ社に勝手に売りつけた愚かな者の末路です」

「ああそういえばこひるに現場の撮影を頼んでおいたのでしたね、あれを持ち出した者の家族に見せたら喜んで絶縁してましたね」

ロツクの疑問に少し不機嫌に答えるこひる、僕。

お陰で何体かのプロタイプのオーバーボディ版の神機ゾンビと戦う羽目になった。

怯まない、耐久力高い、動きすばやい、火器と剣を使うって僕とこひる以外、ラクーンチームも全員防戦一方だった。

まあそれでも倒していたのはさすがだ。

「…話がずれましたね、話を戻しますと僕は貴方の父上、ディエゴ氏と個人的な面識があります。そのさいに彼に相談されたのです。」

莊園をマフィアに狙われていることと、ロベルタさんのこと」

「…そこまでは僕聞いてないんだけど？」

「教えるつもりは無いといってましたし「ええっ!？」まあ早い話が莊園が危なくなったら個人的に保護してほしいとね」

そこまでいうとバラライカさんが声を出してきた。

「個人的…つまり会社で保護するつもりは無い、と」

「はい、会社から見たらメリットは少なくリスクだけがある、なんてふざけた事許してくれませんか。だからといって私は仲良くなつたラブレス氏をみすみす見殺しにできるほど冷酷ではありませんから」

「…それだけではないだろう？」

「…そうですね、彼は有能、息子は将来有望ですから、といえは分かってもらえるかと」

そういうと、バラライカさんは一応納得しておいてやる、といったように頷いた。

やはり鋭い。

「軍曹」

「はっ」

バラライカさんはそのまま後ろの軍曹さんと呼んだ。

「その二人を丁重に日本の空港まで護衛しろ」

そう言つて、僕にやりと笑つた。僕も微笑んで返した。

「有難う御座いますバラライカさん」

「ひとつ、貸しですね」

バラライカさんの笑みが深くなった。

「…ちよつと待てよ、何だかわからねえがあたしの怒りは収まつちやいねえぞ」

このまま丸く終わるかと思つた時に、レヴィが横槍に入つた。

「本人が納得言つてようがなんだろうが、ここはひとつ、正々堂々とそのメイドを殴らせやがれ」

「確かに誤射とはいえ、千早さんを撃ってしまったのは申し訳ないですが…めんどくさいですね貴女」

「…！んだと、この…！！」

レヴィが怒ってくれるのはうれしいんだけど…と思つているとダツチから案が出た。

「なら両方獲物なし、素手でのタイマンならいいんじゃないか？お互い死んじゃヤハが悲しむだろうしよ」

その言葉とともに二人とも凄い勢いでぶつかり合い始めた、それはもう、ゴッ！！グシャッ！！ってレベルで。

…なんか色々鬱憤たまつてたんだね。

「それよりこれ…ホントに死なない？」

「言っというてなんだが…少し不安だ、なんかあつたらヤハに頼むわ」

そしてグダグダな結果、やっぱりドロ。二人を『治癒』である程度治して、ロベルタとガルシア君は軍曹達に護衛されながら日本に向かいました。

「ヤハ…戦い方、教えろ（ボソツ）」

ついでにレヴィ魔改造も始まります。

第08話（前書き）

双子は好きです。

そろそろ急展開いれたい今日この頃。

第08話

「千早様、紅茶が入りました」

「ああ、ありがとうございます」

今日から僕達は基本休みです。

それはなぜか？

今度は一週間もしないうちに1月分の仕事が終わってしまったからです。

「お願いします。休んでください」

とはダッチの言葉です。はい、遂に敬語になってしまいました。

仕事量も増やしてもらっているのになぜこんなにすぐ終わるのかというと。

【回想】

「え」とレヴィからは、この前使ったグレネードの補給増産、9mm弾、ダッチからはリボルバーの弾、エダからは12.7mm弾が1万発ほど依頼が入っている…」と

今月の仕事の一部をを読み上げ、手をポンツと合わせる。

「それではやってしましましょう、こひる…は今日はいないんでし

たね」

確か今日はベニーの手伝いになっているはずだ。

ということとは今日はここに誰も来ない…。

ドキドキドキ。

「ソ、ソードバレル、フルオープン…／＼なんてできる訳が」

ヒュヒュヒュヒュッ！！！！

「へうつ！？で、できちゃいました？というか体から直接じゃないのに銀を具現化できました？」

目の前には空中に浮く大小さまざまな剣。

とりあえず危ないのでゆっくり降ろして別のダンボールしまう。

「たしか…ですだよさん？でしたっけ？いくつか頼まれていましたし、残りもおまけという事で」

せっせこせっせこ…。

「ということとは…はい！」

ヒュヒュヒュヒュヒュヒュ×100？以上

「…まさかできないことは無いとは思っていましたが…並列思考も使用したとはいえ、さっき言った弾薬を一瞬とは…成長しました」

とりあえずそれぞれの弾箱に仕分けて降ろす。

本当にすべてあるか確認をすると以下の通り。

グレネード弾×50、9mm弾×300、リボルバー弾×100、
12、7mm弾×10000。

魔力は…これでも全体の1%いかない。

「…もしかしてこれでもできるのでは？」

ヒュン！

弾丸10発が入ったベレッタのマガジンが手に現れる。

「どうやら多少複雑でも銀で構成できるようになったようです」

今までは弾は造れても、いちいち弾倉に込める必要があったからどうしても戦闘中には補給できなかったんですが…その苦勞もこれまでですね。

—1時間後—

「はっ気づいたら今月の分を終えてしまいました!？」

【回想終わり】

「まったく千早様は…いくら集中し過ぎだといっても…」
「ですねえ、さすがに無いですねコレは」

まあ多すぎてあまってしまった弾は幾分かこひるに持って貰って、部屋にダンボールで積んである。

ちなみにエダやですだよさんには何度かレヴィやロックについていて知り合っていた。

勿論殆どの武器は暴力教会を通してあるし、弾薬は許可もらっている。

むしろ、こちらに頼んでくることもある。

後はこれをダッチに頼むだけである。

今月の仕事、しゅくりょ…です。

「…鍛錬でもしますか」

「そうですね、千早様に転生してからもう随分と場数も踏みまし、色々と試してみてはいかがでしょうか」

そういえば、多分これは転生の弊害？というものが唯一あった。それは前世に比べて、未だに格段に弱いということだ。

前世で習得した魔術もこちらに来てからはしばらく、感覚が上手く掴めずに頭をひねったのを覚えている。

とはいっても、前世でもそんな小難しい魔術は教えてもらっていないので（強いていえば操影術くらい）1年くらいで取り戻せたのだ。

簡単に言えば以下のようになる。

前世

長門 亮 LV90（冥界での最終LV）

技能レベル ラーニング LV5

今世

御門 千早 LV25

技能レベル ラーニング LV2

追記：転生補正+????

……といった感じである。

つまり、体は一から作り直だし、未だに多少の感覚不一致があるし、技能習得も遅い。

そのままなのは、賢さ、精神などの頭脳面くらいである。

後、やたらと魔力が多いくらいで、今の僕はどちらかというとまだ、魔法使いや僧侶……いや狩人くらいのステータスだと仮定ができる。

（本人はやったこと無いが、実際はパンチ一発けり一発で、ザンギエフレベルが場外スマッシュできるが）

そういえば冥界で習得した悪魔魔法、何ひとつ使えませんでした……

適正無いのでしょうか、それとも技能レベルが低い？

……まあ置いて置きましょう

さて、鍛錬に移るとしましょう。

今の私の武器は基本射撃、後は居合いに軽く柔術を組み合わせたものを使っています。

こひるに入れたホログラム装置で冥界での悪魔や、こちらで出会ったある一定の強さを持った人間や生物兵器などを記憶再現してスコ

アを取っていくものです。

毎回ランダムなうえ、急に死角からお構いなく来たりします。
ちなみに、これは実弾を使い、ヒットした位置、弾丸使用数上限あり、体術あり、被弾時はスコア半分のうえ被弾による行動制限加算重力、制限時間1時間、敵数100〜130。
勿論、早く倒せば倒すほどスコアに加算されます。

ぐしゃあっ！！

「へうつ！？」

…被弾しました。

結果は…見るまでもありません。まだまだです。

ルナティックだとしても被弾してしまいますね。
何せゾンビでさえ速度10倍ですし。

気を取り直して次です。

前世でも、自分勝手な転生者が跋扈していたというのをルサルカさんと神さまに聞いていたので対転生者用の得物を鍛える必要があります。

とはいっても、聖約・運命の神槍機神・鋼化英雄は出すだけで周りが危険なので（洒落ではなく、次元震が起きそう…あれ？これフラグ…）練習すらできないのですが…。

デア・フライシュッツェ・ザミエル
なんとか極大火砲・狩猟の魔王は短時間ですが、圧力を抑えて形成

できるようになりました。

その他も大体は形成位階を維持できるようになりました。

さて、僕の持ち味は聖遺物を多く所持、使い分けるマルチ・ウエポ
ン戦法になります。

瞬時に、次々と取り出し、持ち替え、射出して敵を翻弄、圧倒する。

まだ感覚に慣れないせいか上手く形成の切り替えができませんが練
習あるのみです。

「形成、「ウルシャワ・ゲットー」辺獄舎の絞殺縄」

離れたところにいるゾンビ数体を切り刻み、

「キシヤー!!」

「! 形成、罪姫・正義の柱、マルグリット・ボア・ジュステイスはあっ!!」
『いくよ!!』

首狩に来たハンターの爪を硬化した右腕で弾き、逆に上下に切り分
ける。

ああ、そういえばリリイは、いませんでした。さっきの声は平行世
界のリリイだそうです。なぜなら藤井蓮を知りませんでしたので、
はい。

それに私の聖遺物、沢山在るからなのか、使用せずとも吸収した魂
を自動で分配するようでした… もしやと思って確認したら、ラク
ーンでの魂が大量に在りました。

…まあ、生物兵器にも魂は在りますし、殺されて浮遊していた霊な
んかも（それは同意の上で）吸収してましたし…。

何体クリーチャー狩ったか覚えてないですし。

「形成、闇の賜物」
クリフォート・バチカル

シユシユシユシユッ！！！！

杭を射出し、舌を伸ばそうとしたリッカーと突撃準備中のタイラントを殲滅。

「形成、緋々色金」
シャルラッハロート

いきなり上から落下してきたキメラを全身とともに切り払い、燃やし。

「形成、戦雷の聖剣！つてしまった！」
スルーズ・ワルキューレ

急ぎすぎて緋々色金の形成を解き忘れてしまいました。
シャルラッハロート

「ああ、また失敗…あれ？」

失敗かと思いきや逆の手に現れる戦雷の聖剣
スルーズ・ワルキューレ

「ええと、とりあえずそのまま、せいっ！」

接近を許してしまったネメシスに連撃を加えます。

燃烧と電撃を両方まともに食らい膝をつくネメシス。

「止めます！！！！雷炎衝波！」

十字に切り払うと同時に雷を纏った熱線がネメシスを襲い、蒸発させました。

「はい、終わりです千早様…どうしました？」

「いえ、なんでもありませんのよ？なんでも…」

二重形成なんて在り得ないものだからまだ喜んだことでしょう。いくら、混乱していたとはいえ…。

（とっさに出したのが雷炎衝波ってなんですか！？）

「へう~~~~~!?!」

痛い、胸といわず頭といわず心とか魂が痛い。

そして、

（は、恥ずかしい…穴があったら入りたい~~~~~//////）

「へう~~~~~!?!」

悶絶していた、ついさっき女言葉を使ってしまったのなんてまったく気がつかないまま。

それを見たこひるは。とりあえずこひるは。

「…お茶、入れてきますね」

逃げた。

「へう~~~~~!?!」

この痴態はダツチ達が仕事を終えて帰ってくるまで尾を引いていた。

その後。

「雷炎衝波！魔神剣！」

開き直りました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4286v/>

破綻者の転生（仮）

2011年10月23日14時18分発行